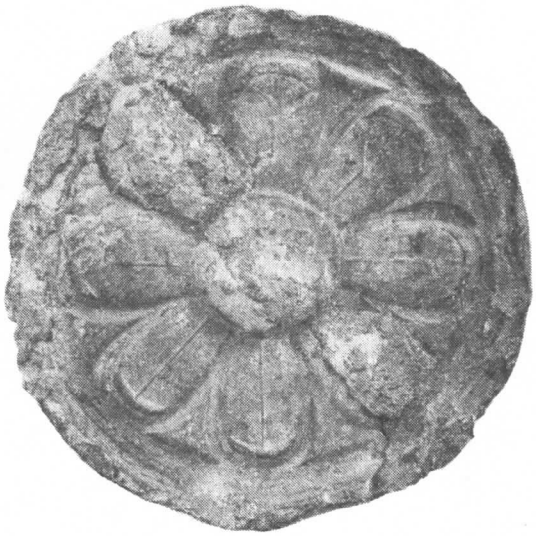
横滝山廃寺跡発掘調査概報

——昭和58年度——

第3次調査



1984

寺泊町教育委員会

序

昭和58年夏に行われた横滝山廃寺跡の第３次発掘調査が関係諸氏のご尽力により，大きな成果をおさめてここにその概報が刊行されましたことに対し深く敬意を表します。

古来聖域とされた横滝山の発掘調査も，回を重ねて３回に及び，秘められた古代史のロマンが，徐々に解明されていく中で，町民がこの地に寄せる期待と関心が一段と深まる思いがいたします。

横滝山は海岸から約５km，周囲の水田からの比高約10mの小高い丘陵で眺望のきく景勝の地であり，地域のシンボル的な聖地であります。この地には古い時代に何かあったのではないか，それはお寺かお社かそれともトリデか，先住民族の集落か，といろいろ取り沙汰されながら，昭和51年度の第１次発掘調査で，出土品や基壇状遺構の一部から瓦葺きの建物の存在が予想され，昭和57年度の第２次調査で，その建物の種別，規模はどうなのかについて究明のメスがふるわれました。

そして更に昨年，文化庁，県教育委員会のご懇切なる指導，支援によって第３次の発掘調査が計画され，和洋女子大学教授の寺村光晴先生を三たび団長に委嘱して調査が実施されたわけであります。

文化財関係の仕事は地味であります。特に横滝山の広い地域の土中に眠る遺跡の発掘解明は，機械や科学的な作業は当を得ないだけに難儀されたと思います。諸般の事情もあって今回も夏の炎天下に調査作業が行われたわけですが，ここに改めて発掘調査に当たられた方々の労をねぎらい深く敬意を表します。

今後また引き続いての調査が期待されますが，関係各位のご指導と各方面の一層のご協力によりその全貌が解明される日を切望いたします。

ここに横滝山廃寺跡第３次発掘調査概報の刊行を祝し，本書が広くわが国古代史の究明に役立つことがあれば幸いと存ずる次第であります。

寺泊町長　　中　島　甚一郎

例　　言

1.　本書は，昭和58年８月18日から９月30日の間実施した，新潟県三島郡寺泊町大字竹森，通称横滝（崎）山所在遺跡の第３次発掘調査の概要である。表題は，文化財保存事業としての申請書題名によった。

2.　本発掘調査事業は，新潟県三島郡寺泊町（町長中島甚一郎）に対する文化庁・新潟県教育委員会の昭和58年度文化財保存事業として行われたもので，寺泊町教育委員会（教育長廣田廣四）が実施したものである。

3.　発掘調査は，発掘調査会（会長中島甚一郎）を組織し，寺泊町および発掘調査会が発掘調査団（団長寺村光晴）に委嘱して行った。関係者・参加者は後記の通りである。

4.　本書は，次の諸氏により分担執筆されたものを，調査団長寺村光晴がとりまとめ，編集した。編集には千家和比古の尽力があった。

Ⅰ　寺村光晴

Ⅱ　（１）寺村光晴　（２）駒見和夫　（３）駒見和夫

Ⅲ　（１）寺村光晴　（２）駒見和夫　（３）上野邦一

Ⅳ　（１）前島己基　（２）前島己基　（３）千家和比古・駒見和夫　（４）寺村光晴

Ⅴ　寺村光晴

Ⅵ　倉林真砂斗

挿図は，上野邦一・前島己基・駒見和夫が作製した。

5.　本発掘調査には，各方面から公私にわたり物心両面の多大なご援助を頂いた。ご芳名は，できるだけ記させて頂いたつもりである。もし，失礼があったならお許し頂きたい。ここに衷心より深く御礼を申し上げる次第である。

目　　次

序　　寺泊町長　中島甚一郎

例　　言

Ⅰ　遺跡の立地と環境……1

Ⅱ　発掘調査の経過……3

（1）既往の調査……3

（2）第2次調査……3

（3）発掘調査の経過……5

Ⅲ　調査の概要……6

（1）遺跡の概観と調査方法……6

（2）表採遺物の分布……7

（3）遺　構……9

1）7世紀末の遺構……9

2）8世紀の遺構……12

3）寺院造営前の遺構……12

4）8世紀後半以降の遺構……12

5）時期不明の遺構……12

6）DJ～DM55・DH48～51・BJ～BR63トレンチ……12

7）小　結……14

Ⅳ　出土の遺物……14

（1）瓦　類……15

1）平　瓦……15

2）丸　瓦……19

3）軒丸瓦……19

4）軒平瓦……19

5）鴟　尾……19

（2）塼　仏……20

（3）土　器……21

1）土師器……21

2）須恵器……21

3）古墳時代の土器……24
（4）その他の遺物……25
1）硬玉原石……25
2）玉作関係遺物……26
V　結　語……26
VI　付　篇……28
子持勾玉……28
あ　と　が　き　　寺泊町教育長　廣田廣四

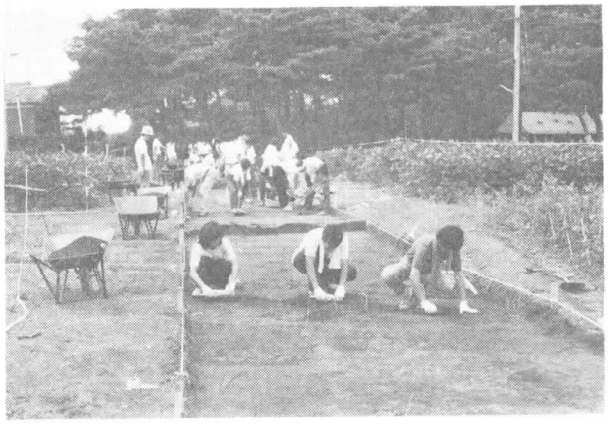
挿　図　目　次

第 1 図　横滝山遺跡付近地形図……2
第 2 図　地形測量図……4
第 3 図　表採遺物の分布図……8
第 4 図　台地中央部トレンチ……折込
第 5 図　ＳＢ310南辺（左）・北辺（右）断面図……10
第 6 図　ＳＫ303実測図……11
第 7 図　ＤＪ～ＤＭ55トレンチ・ＤＨ48～51トレンチ実測図……13
第 8 図　ＢＪ～ＢＲ63トレンチ実測図……14
第 9 図　平瓦拓影……15
第 10 図　平瓦拓影……16
第 11 図　丸瓦拓影……17
第 12 図　軒丸瓦（1．2），軒平瓦（3．4）拓影……18
第 13 図　塼仏実測図……20
第 14 図　土師器・須恵器実測図……22
第 15 図　土師器実測図……23
第 16 図　硬玉原石（1），玉作関係遺物（2）実測図……25
第 17 図　子持勾玉実測図……27

図　版　目　次

図版第一　1）台地中央部トレンチ全景（南側より）　2）ＳＢ310北辺付近トレンチ
図版第二　1）ＳＢ310北辺（西側より）　2）ＳＢ310北辺（東側より）

図版第三　1）ＣＲ54～59トレンチ及びＳＢ310南辺部分　　2）ＤＡ54～61トレンチ及びＳＢ310北辺部分　　3）塼仏出土状態　　4）ＳＢ310北辺断面
図版第四　1）ＣＦ～ＤＣ54トレンチ及びＳＢ310北辺部分　　2）ＳＤ305遺物出土状態　　3）ＳＤ305
図版第五　1）ＳＫ303　　2）ＳＫ303断面　　3）ＣＧ～ＤＣ59トレンチ
図版第六　1）ＳＫ301瓦溜め　　2）ＳＫ302瓦溜め
図版第七　1）ＤＨ48～51トレンチ　　2）ＳＤ306断面
図版第八　1）ＢＪ～ＢＲ63トレンチ　　2）ＤＪ～ＤＭ55トレンチ
図版第九　平瓦
図版第十　平瓦，丸瓦
図版第十一　軒丸瓦，軒平瓦，塼仏
図版第十二　鴟尾
図版第十三　土師器，須恵器，古式土師器



Ⅰ　遺跡の立地と環境

横滝山遺跡は，新潟県のほぼ中央の中越地方海岸寄りにあり，行政上は新潟県三島郡寺泊町大字竹森，通称横滝(崎)山にある。中越地方は海岸に併行して西山丘陵，島崎川，曽地（道山，小木）丘陵が雁行し，海岸側の西山丘陵は北にのび国上山，弥彦山へと連なるが，曽地丘陵は横滝山を北端として蒲原平野に突出している。海岸までの距離は約５kmである。

横滝山の東は，曽地丘陵の麓にそって北流してきた信濃川が西川などの分流を開始する基点に当り，明治41年起工，大正11年完成という大河津分水，現新信濃川も横滝山の北側を西流して日本海にそそいでいる。このため，遺跡の北・東側は氾濫原で，自然堤防がつくられ集落が発達している。大河津分水開鑿前は，島崎川が横滝山の東北麓で信濃川に合流していたが，古くは円上寺潟に流入していたものと推察される。北側は旧円上寺潟（現水田）であり，また現在の新信濃川（分水）の川筋にそい，円上寺潟付近に源をもつ須走川が日本海にそそいでいた。

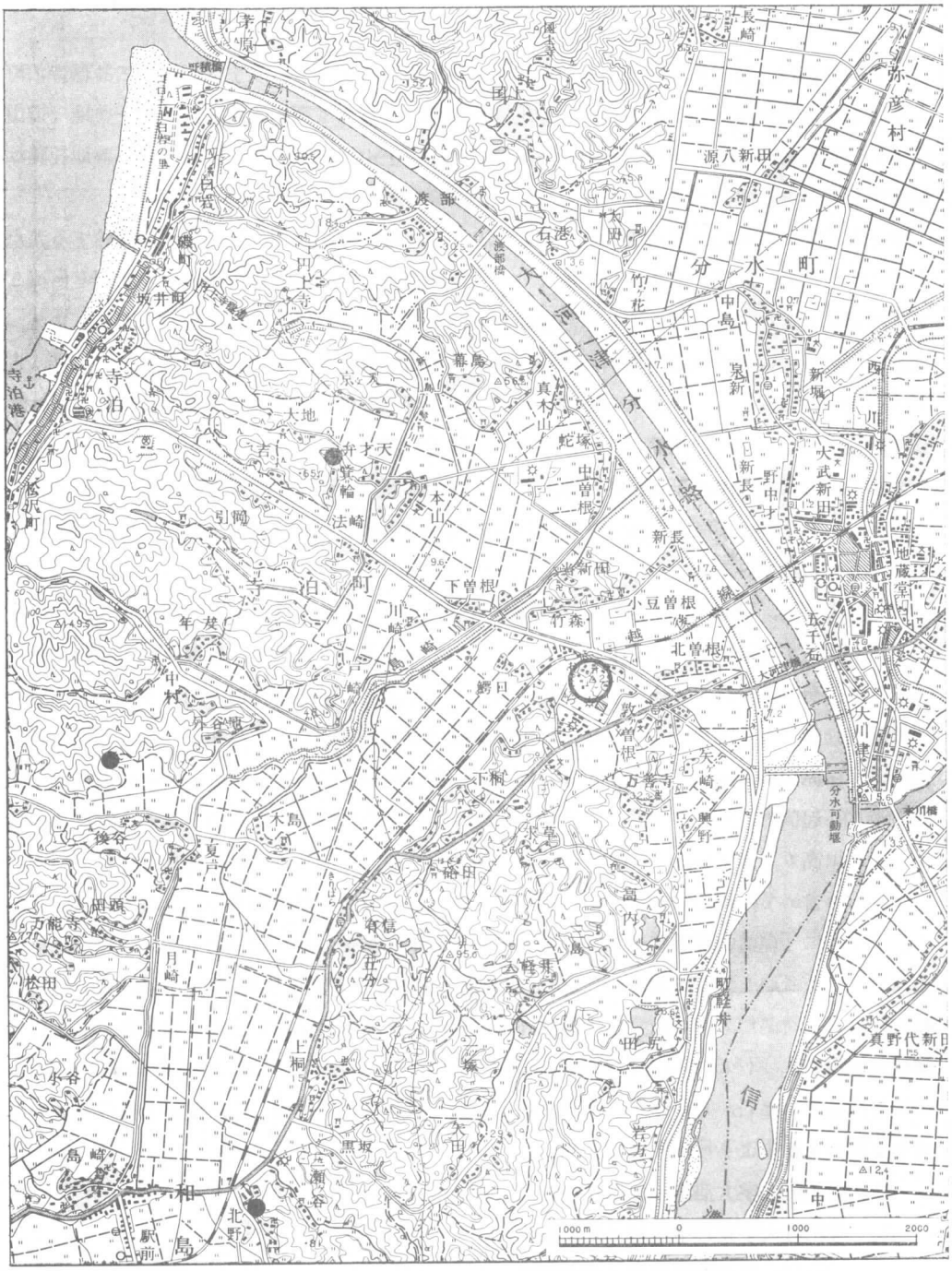
遺跡のある横滝山の直下は，古く東側に八ケ村用水溜，西側に小溜（古溜ともいう）が接していたが，いずれも潟湖の名残りと思われる。現在は水田あるいは宅地，工場用地として，干拓埋め立てられている。

以上のように，横滝山は南西側を除き，沖積平野に佇立した丘陵である。江戸時代の文化８(1811）年，すでに橘茂世が『北越奇談』のなかに「寺泊より東一里，竹森といへる古き砦の跡ありて，角櫓とおぼしき所もっとも高く方なり」と記しているように，四周よりよく遠望できる独立丘状の小丘である。大正年代，本横滝山の研究に没頭し，その顕彰に奔走された星岩治氏は『桐原御神陵誌』（大正４年９月刊，「竹森大塚古墳ノ研究」）中に，「横滝山ノ地タル，其西南ヨリ起伏セル丘陵ノ中断シテ，切通ト字セル疏水路ヲ越エテ，又山ヲ為セル北端ノ一区ニシテ，山高カラズト雖四望開豁風景絶佳ノ展望丘タリ」と，よくその景観を記されている。

横滝山を含めて，周辺には縄文時代から歴史時代に至る間の遺跡が多い。これらの遺跡についてはすでに『横滝山廃寺跡発掘調査概報―昭和51年度調査―』（昭和52年３月，寺泊町教育委員会）中に概略を報じており，その後も『寺泊・出雲崎―新潟県文化財調査年報第16―』(昭和52年３月，新潟県教育委員会)，『国立寺泊療養所建設埋蔵文化財発掘調査報告書―桐原石部神社御廟所―』(昭和52年３月，新潟県教育委員会）中にそれぞれ詳細に報告されているので，ここでは省略したい。しかし，今次調査出土の瓦，須恵器等に関連して，窯跡と推定される遺跡を上記の文献中より摘出すれば，

1.　寺泊町大字大池字小丸山（弁財天窯跡）
2.　寺泊町大字夏戸字中村（夏戸窯跡）
3.　和島村大字北野字中道（中道窯跡）
4.　和島村大字小島谷，旧北辰中学校々庭（瓦窯跡）

の4個所がある。いずれも発掘調査にまでは至っていないので，時期および本遺跡との関係は明らかでない。今後の発掘調査が望まれる。



第1図　横滝山遺跡付近地形図

○横滝山遺跡　● 1. 弁財天須恵窯跡　2. 夏戸須恵窯跡　3. 中道須恵窯跡

Ⅱ 発掘調査の経過

（1） 既往の調査

横滝山は江戸時代より注目され，明治以降も古墳に比定されるなど，常に古蹟として関心の対象になってきた。以上のことについては，すでに『横滝山廃寺跡発掘調査概報―昭和51年度調査―』（昭和52年３月，寺泊町教育委員会）のなかに記述しているので，ここでは省略したい。

今次調査は，本遺跡から採集された軒丸瓦，鴟尾，「寺」字墨書土器等の採集遺物に端を発した昭和51年８月の第１次調査および昭和57年８月の第２次調査に次ぐものである。第２次調査の経緯については，すでに『昭和57年度調査』概報があり，下記にも記載している。また，昭和50年８月に新潟県教育委員会が実施した「三島郡海岸地域文化財総合調査」の報告書が『新潟県文化財調査年報第16，寺泊・出雲崎』（昭和52年３月刊）として刊行され，このなかに関連の記事がある。すなわち，

> 特に，横滝山周辺の調査では，鴟尾の発見，(註)〈寺〉字墨書の須恵器坏の確認等により，寺院跡の情況証拠が集まった。

とあり，さらに「註」として以下の記述がある。

> 最初の鴟尾片１点は，小宅朝男が20年程前に横滝山で採集し，瓦塔の一部と考えていた。昭和50年に小宅は，その鑑定を中村孝三郎に依頼，中村は昭和51年１月，越後古代研究会の例会に際して，これを提示して意見を求めた。本調査はこれを端緒にして横滝山に注目し，星修平所蔵の破片４点を確認したものである。　（寺村光晴）

（2） 第２次調査

第２次調査は，第１次調査において基壇状遺構の一部を検出していたので，その内容を把握し，遺構の性格を明らかにすることを目的として，昭和57年８月24日から９月15日にかけて実施したものである。この調査では基壇とその上面に掘立柱痕を検出したが，基壇上に存在する掘立柱の建物跡は，遺構の状態や出土土器の時期的な面等から，横滝山において星氏や小宅氏によって採集された軒丸瓦や鴟尾を伴うものでない可能性が大であった。しかし，第２次調査では本地において発掘によりはじめて鴟尾が出土し，横滝山の台地上に鴟尾を伴う遺構の存在することが確実となった。このことから，検出された基壇や掘立柱の遺構は時期的に違ったとしても，鴟尾を伴う遺構が他にあり，それとの関係からも本遺跡の重要性が一段と高まることとなり，次期調査への期待が高まったのである。　（駒見和夫）

第２図　地形測量図（スクリントーンは第３次調査地区）

（3） 発掘調査の経過

本遺跡は，昭和51・57年度の２度にわたり発掘調査が実施された。その結果，横滝山の台地北部に基壇を有する建物跡や，瓦・鴟尾等の遺物が検出された。しかし検討の結果，出土した瓦や鴟尾は，検出された基壇を有する建物跡には伴わない可能性が強いと考えられた。そこで今回は，これまで調査されていなかった横滝山の台地中央部と南部を中心に発掘し，鴟尾を含む瓦等を伴う遺構の検出と，あわせて本遺跡の性格をさらに究明することを目的として実施した調査である。

発掘調査は，昭和58年８月18日から９月30日まで，実質20日間にわたって実施した。

８月18日　当初の予定では17日に調査団が現地に集合するはずであったが，折悪しく大型の台風５号が本州中部に上陸したため，その影響を受けて集合を１日延期した。午後，町教育委員会・調査会・調査団の打ち合せと現地視察を行う。

８月19日　午前９時，現地において当銀敏雄助役以下地元関係者，並びに廣田廣四教育長以下教育委員会関係者，地主，調査団，与板高等学校寺泊分校生徒等全員が参列して，仏式による地鎮祭を行う。

つづいて，昨日の打ち合せ会議で検討予定しておいた台地の中央部に，グリッド法を併用した南北48mのトレンチを，12mの間隔をおいて東西に２本設定する。またこれと併行して，次に設ける発掘区の目安とするために，横滝山の台地全面にわたって分布調査を行う。

８月20～22日　設定したトレンチの発掘をはじめる。西側のトレンチの北部とほぼ中央部に瓦溜めが検出されたが，建物の遺構は確認されなかった。

８月23～25日　新たに東西両トレンチを南の農道まで拡張し，つぎに西側トレンチで検出された瓦溜めの全貌を検出するために一部を拡張する。また，分布調査において比較的多くの瓦が散布していた東・西両トレンチの間に，両トレンチと直交するように２本のトレンチを，さらに台地南側にある比高約５ｍの小丘のほぼ中央に，南北27mのトレンチを設定し発掘を行う。

調査は，発掘開始以来これまで，不順な天候がつづき，このため遺構のうえにテントを設営して発掘を行ったり，トレンチ内に雨水がたまりその排水に追いまわされるなど非常に難航した。

８月26～９月１日　第２次調査において検出された通路状遺構の延長を確認するために，台地北側に南北12mのトレンチを，また台地北東部の旧神社の共有地の付近が他と比較して若干高くなっているので，そこに東西12mのトレンチを設定し発掘を行う。共有地のトレンチでは，幅約2.3m・深さ約1.4mの南北に走る濠が検出される。

一方，これまで設けたトレンチすべての精査を行う。その結果，東側トレンチの中央から若干北寄りの小溝上部で塼仏片が出土。また，東側トレンチの北部に基壇地覆石の抜き取り痕が，また西側トレンチのほぼ中央において礎石痕が各セクションで検出された。

この間，29日には調査期間中唯一の休みをとり英気を養う。また，31日には与板高等学校寺泊分校の生徒諸君が，新学期が始まるため現場を去った。雨天中，あるいは炎天下においての高校生諸君の精力的な活躍により，調査団の意気は大いに高まり，不順な天候をものともせず調査を続けることができたのである。

9月2日　発掘区を清掃した後，遺構及び全景の写真撮影を行う。

9月3日　多数の町民をはじめとし，広く新潟県内各地の研究者や遺跡に関心をもつ方々，さらにマスコミ関係者に案内して発掘調査現地見学会を開催した。約200人もの方々が来跡された。本遺跡への関心の高さに身の引きしまる思いであった。

9月4・5日　遣り方測量により発掘区の測量を，その後器材整理等の作業を行う。

9月6日　本遺跡において採集された遺物を所持されている地元の方々から，それらの実測・拓本・写真をとらせていただく。

9月30日　山添組により埋め戻しを行う。埋め戻しは，第2次調査の時と同様に遺構の保存と再発掘を予想し，浜砂を発掘区全面に敷く。本日をもって，すべての作業を完了する。

調査期間中，県内各地から多数の方々が見学に来跡された。また，与板高等学校寺泊分校生徒諸君や，地元の方々の積極的な応援を得た。高校生の中には，新学期が始まってからも下校後や休日に現場にあらわれ，自主的に手伝ってくれた諸君もいた。発掘調査が順調にすすめられ，多大な成果を得ることができたのも，これらの方々の御協力による賜である。心から感謝いたします。

（駒見和夫）

Ⅲ　調査の概要

（1）　遺跡の概観と調査方法

遺跡の概要については，すでに第1次調査の概報である『昭和51年度調査』の中に記しておいた。しかし，本調査に関連するところが若干あるので，一部を摘記し追記しておきたい。

遺跡は，東西約150m，南北約200mで，比高約10mの丘陵上にある。丘陵上はほぼ平坦で台地状となり，ほとんど畑地となっているが，北端部と南西部が山林である。中央部は，現地表面下約15～20cmで地山層に達する。

発掘調査前の観察によれば，この丘陵台地の北縁部（現在は共有地，山林）一帯から瓦片が多く採集され，北西縁部および南西縁部からも採集されていたという。かつては台地全面にわたり瓦片が採集されたというが，現在は少ない。台地上がほとんど畑として耕作されているので，耕作時出土の瓦片が台地の周辺に捨てられたのではないかと思われる。また，台地上より運び出されたという礎石が，大正年代の記録に6個ある。現在その所在が確かめられるのは，竹森神社前の1個のみであるが，これは長径1.5m，厚さ20～30cmの砂岩質である。発見時の状態および原位置については，古いころであるので判明していない。ただ，最近台地東麓の小

田吉松氏宅の宅地造成に際して，崖よりころがり落ちたというのが２個あり，出土状態の一端を知ることができる。

なお，台地の西側，ことにその北半部は縄文時代晩期の遺跡で，診療所裏の崖崩壊の際も多数の遺物が出土したという。また，その南側から弥生式土器片を採集している。台地の東縁付近は第１次調査時に古式土師器が発掘され，溝状の遺構の一部を検出しているので，方形周溝墓等の存在の疑いが濃い。台地の南側は，第１次調査において発掘の対象となった塚状遺構の舞台塚があり，古くから古墳と称されてきたものである。墳頂部には石塔がある。数年前までは墳裾にあり，旧道の道標となっていたものという。さらに，その南に直径６ｍ，高さ1.33ｍの塚状のものがあり，庚塚と称されていたが，現在は形状を損ね旧状をしのぶことができない。以上については，風間正太郎『桐原石部神社並神陵考』（大正４年），星岩治発行『桐原御神陵誌』（大正４年），寺村光晴・久我勇『寺泊のおいたち』（昭和35年）等に詳しい記述がある。

第１次の発掘調査は，台地のほぼ中央北よりに基準杭（ＢＭ１）を設け，ＢＭ１より真南82.9ｍと113ｍにも基準杭を設け，それぞれＢＭ２，ＢＭ３とした。ＢＭ１をＤＫ50とし，この南北基線（磁針方位は西偏約7°0′）を中心として，台地全体に３×３ｍのグリッドを設定し，このグリッドを併用して大小７つの発掘（トレンチ）区を設けた。なお，各単位グリッド（３×３ｍ）は，アルファベット２文字と，２桁の数字の組み合せによって呼ぶこととし，基線を50とし，東へ49．48．47……，西へ51．52．53……とし，それに直交する南北方向は，遺跡中央部をＤＡとし，北へ DB．DD …… DT，南へ CT，CS，CR …… CA と，60ｍごとに，上位のアルファベットを繰り上げ，あるいは繰り下げることにした。また，３×３ｍの各単位は，その東南隅の交点の名称で呼ぶこととした。たとえば，50ラインとＤＡラインの交点を東南隅に持つ単位はＤＡ50である。

今次の調査は，以上の第１次調査で設定したグリッドを用いて実施した。

（２） 表採遺物の分布（第３図）

今回の調査では，遺跡の状況をより詳細に把握し，新たなトレンチ設定の判断材料とするために，横滝山の台地全面にわたって入念かつ組織的に遺物の表面採集を実施した。

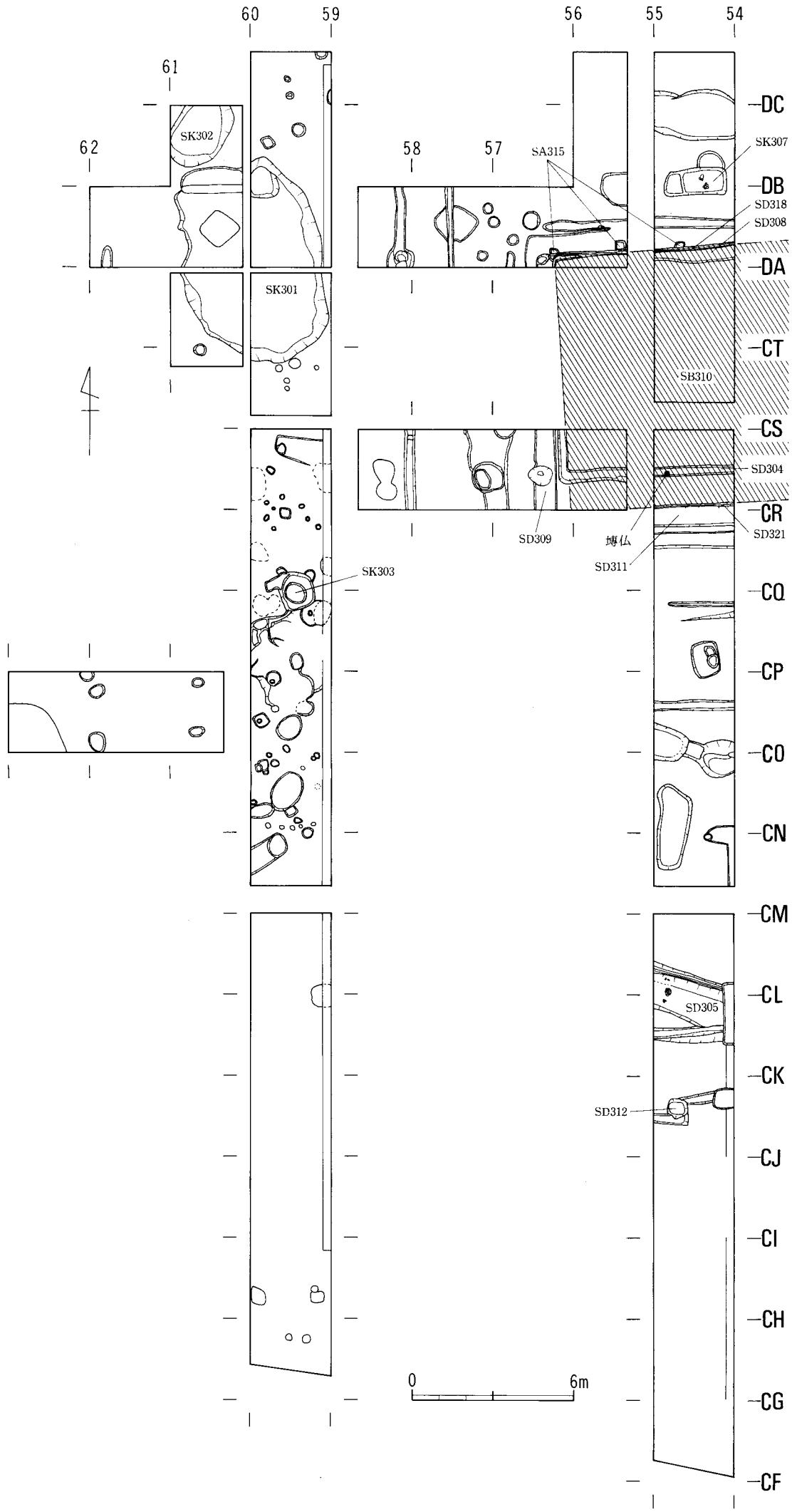
なお，本調査はこれまでの発掘調査等で出土した，鴟尾や瓦を伴う遺構の検出を主目的としているため，採集した遺物は瓦，土師器・須恵器，その他の遺物（縄文式土器・弥生式土器・古式土師器）の三種類に分類しドット化した。

瓦は，台地のほぼ中央から東側にかけて集中している。また，北側の小道に沿った斜面上部付近にも比較的まとまって採集された。

土師器・須恵器は，台地中央から東側にかけて分布が集中しており，採集されたこれらの比率は約９：１で，小片がほとんどを占め，全体の器形を推定できるものは全くなかった。

その他の遺物は，台地の比較的広範囲にわたって縄文式土器４点，弥生式土器・古式土師器

第3図 表採遺物の分布図



第 4 図　台地中央部トレンチ

4点，石器3点の計13点が散在していた。縄文式土器では詳細な時期を判断できるものは無く，また弥生式土器・古式土師器としたものも小片のため時期を明確にすることができない。しかし，胎土等から，おそらく弥生時代終末期から古墳時代前期にかけてのものであろう。

以上，全体的分布をみると，土地利用の現状に影響される面が大と考えられるが，瓦と土師器・須恵器の分布範囲は，台地中央から東側にかけてであり，おおむね重なるようである。その中で，台地北側の斜面上部付近にみられる若干の瓦の集中は興味深い。一方，台地の南側ではほとんど遺物は採集されなかった。（駒見和夫）

（3） 遺　構（第4図）

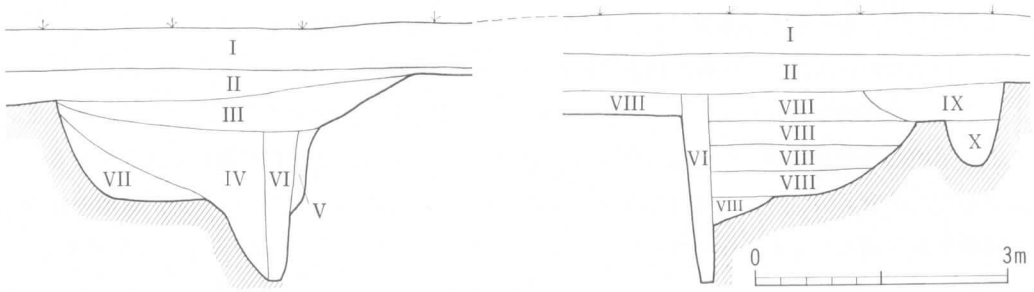
発掘区は全体に畑地である。土層は上から表土・床土があり，床土を取り除くと遺構面に達する。表土・床土の両者で厚さは25cm～30cmである。発掘区のC区から北の遺構面は地山と考えられているが，今回の発掘調査の所見から地山かどうか，今後なお慎重に考える必要がある。CM区から南の遺構面は古式土師器を包含する黒褐色土である。ただし，CM区から南の発掘区DH48～52区・DJ55～DN55区では発掘区を設けたものの時間や人手の事情から十分な調査をするに至らなかった。

発掘区のおもな遺構は，7世紀末頃の寺院に関連する建物・溝・土壙，8世紀後半の土壙である。このほかに寺院造営前の溝・時期不明の小穴・溝などの遺構もあるが，時期不明の遺構の多くは埋土などを観察すると中世以降で新しい。まず主な遺構である7世紀末頃の寺院遺構について述べ，次にその前後の時期の遺構について順次述べていく。

1）7世紀末の遺構

SD308・SD309・SD311　　SD308はDA54～56にかけて検出した東西溝，SD309はCR56～DA56に検出した南北溝，SD311はCQ54～56にかけて検出した東西溝である。SD308の南肩に沿って溝の内側に幅15cmほどの小溝SD318を検出している。この小溝SD318の北に接して東西の柱列SA315がある。SD308・SD309・SD311の3条の溝は幅80cmほどで，埋土には地山の粘土が混じり，遺構の中では古いと判断される。SD308・SD311の土層断面の観察の結果，この3条の溝によってコの字形に囲う遺構は建物の基壇跡であることが明らかになった。

SD308・SD311の西壁際を掘り下げて溝の土層断面を観察した(第5図)。SD308の南肩に沿う小溝SD318は深さ80cmほどでほぼ垂直におちている。小溝SD318の北は地山土が混じり黄褐色土の厚さ10cmほどの層で丁寧に埋められている。SD311でも溝の北肩に幅15cm，深さ60cmの小溝SD321があり，やはりほぼ垂直におちている。小溝SD321の南は地山土混じりの黄褐色土で埋められていた。これらの所見からSD318・SD321は同一の性格で，かつ一対のものであることが明らかである。SD318・SD321の小溝は厚板の痕跡と考えられ，SD308・SD311は溝状を呈するが，厚板の掘形と考えられる。SD308とSD311の間は掘り下



第５図　ＳＢ310南辺(左)・北辺(右) 断面図

Ⅰ．耕土 Ⅱ．暗褐色土層 Ⅲ．地山ブロックを含む暗黄褐色土層　Ⅳ．黒色土を含む暗黄褐色土層 Ⅴ．地山ブロック　Ⅵ．炭化物を含む黒色土層　Ⅶ．黄褐色土層　Ⅷ．黄褐色土層，下層になるにしたがい地山ブロックが多くなる　Ⅸ．暗灰褐色粘質土層　Ⅹ．砂粒を多く含む粘質土層

げて観察していないが，基壇であると判断できよう。

厚板の痕跡は木造基壇外装の可能性がある。木造基壇外装の類例は少なく，平泉毛越寺の南大門・東回廊，嘉祥寺講堂の事例が発掘調査で確認されている(1)。平泉の３例はいずれも12世紀である。飛鳥・稲淵川西遺跡では中心的建物ＳＢ001の北側で，基壇外装とも考えられる性格不明の板材を検出している(2)。さらに飛鳥・桧前寺の金堂の基壇外装は凝灰岩や瓦積みの痕跡がなく，どのような基壇外装なのかはやはり不明(3)で，木造であった可能性もある。これらの諸例からＳＤ318・ＳＤ321の細く深い溝は木造基壇外装の厚板の痕跡と考えることもできるのである。溝の北側に沿って一辺30cm～40cmの方形の柱穴を３つ検出した。この柱列ＳＡ315は木造基壇外装の束・板押えであると理解できる。ＳＡ315の柱間寸法は約2.4mでこれは基壇上の建物の柱間寸法を示唆しているかもしれない。

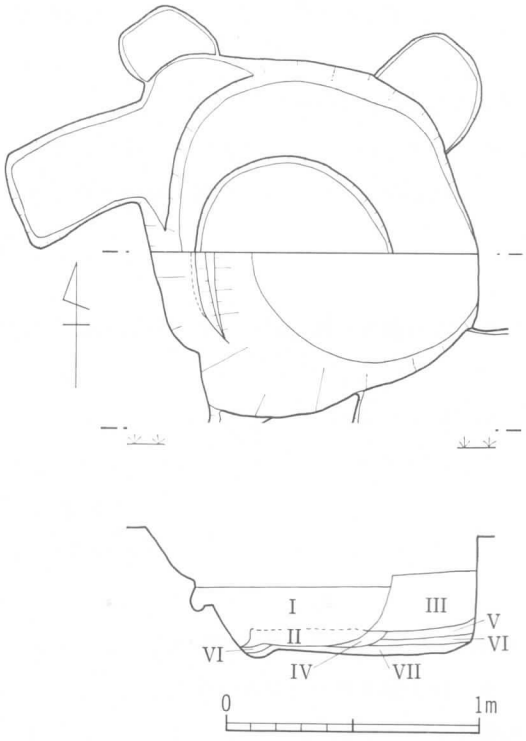
なお，ＳＤ308の北には東西溝が２本観察できる。このうち南の溝は幅20cm・深さ20cmで上部は新しい溝で破壊されている。この南小溝の底には花崗岩の粉末状のものがあるので基壇外装の地覆石の痕跡である可能性がある。北の溝は幅70cm，深さ35cmで，埋土には地山の粘土が混り，ＳＤ308・ＳＤ311とよく似ているので同時期と考えられる。南の溝が基壇地覆石の痕跡とすれば，この北の溝は雨落溝であるかもしれない。木造基壇外装の痕跡であるＳＤ318・ＳＡ315との整合性が問題になるが，２重基壇であれば問題はなく，この点は今後の調査に委ねられよう。

---

(1) 『平泉　毛越寺と観自在王院の研究』　(昭36)
(2) 『飛鳥・藤原宮発掘調査概報　７』　奈良国立文化財研究所　(昭52)
(3) 『飛鳥・藤原宮発掘調査概報　11』　奈良国立文化財研究所　(昭56)

ＳＤ310の南にも東西溝が認められるが，ＳＤ308の北で推定した地覆石痕跡・雨落溝のようには顕著でないので，この推定は今後の調査によって検証する必要がある。ＳＤ318・ＳＤ321の細長く深い溝は厚板の痕跡であるが，これがたんに基壇築成の作業過程で用いただけなのか，あるいは基壇築成後にそのまま木造基壇外装としたものか，についてもやはり今後の調査を待たねばならない。

ＳＢ310　　前述の溝３本で囲まれた基壇跡である。基壇上の遺構面では掘立柱穴は検出されず，基壇築成が堅固であることなどからＳＢ310は礎石建物であったと考えられる。しかし，礎石建物であった事を明らかにする礎石・礎石据え付け穴・根固め石などは検出されなかった。これらの痕跡がすべて削平されてしまうほど創建時の基壇は相当高かったのであろう。基壇の規模は南北がＳＤ308とＳＤ311の溝心々で10.5mである。この長さは桁行としては短かすぎるので，南北が梁行とすれば，東西棟建物と考えられる。基壇の東西幅は，基壇が東の未発掘区へ広がっているので確定できないが，発掘区の東９ｍほどに小さい高低差があり，これが基壇の東端を示す痕跡とすれば東西16mほどとなる。柱位置を示す手掛りはなく建物規模や平面を確定することは困難であるが，基壇規模が東西16m，南北10mとすれば柱間寸法８尺等間とする桁行５間・梁行４間，三間四面の建物を想定することはでき，小さい堂舎である。また，基壇規模が10.5mの正方形であるならば塔基壇となろう。一間８尺等間の方３間として三手先級の組物を持つ塔を考えることができる。



第６図ＳＫ303実測図
Ⅰ．炭化物を含む灰黒色土層　Ⅱ．Ⅰより明るい灰黒色土層　Ⅲ．炭化物を含む淡褐色土層　Ⅳ．黒色土層　Ⅴ．淡褐色土層　Ⅵ．黄白土のまじった淡褐色土層　Ⅶ．明淡褐色土層

ＳＫ303（第６図）　　ＣＰ59にある円形の穴で，２重になっていて外側の穴は直径12cmほど，内側の穴は直径75cmである。埋土には炭が混じり礎石抜き取り穴の可能性がある。しかしＳＫ303と関連しあう礎石の痕跡は周辺には明瞭にはなく，ＳＫ303が礎石抜き取り穴かどうか疑いがのこる。礎石抜き取り穴とすれば，この近辺に礎石建物の存在が予想され，例えば，ＣＰ59～ＣＱ59の東壁に認められる二つの穴が，ＳＫ303と関連するかもしれない。

ＳＢ310では礎石の痕跡は検出されず，またＳＫ303近辺でも礎石の痕跡が検出さ

れていないのにこのＳＫ303だけが痕跡をとどめている。礎石抜き取り穴とすれば，この礎石は他の礎石よりも一段と深かったことを示唆しているとも考えられ，その場合はＳＫ303が塔心礎の可能性がある。

２）８世紀の遺構

ＳＫ301　　ＤＡ60地点を中心に東西６ｍ・南北８ｍほどの大土壙で，瓦溜めである。中心部の深さは45cmほどでレンズ状に掘られている。大量の丸瓦・平瓦が投げ込まれていた。丸瓦には行基葺のもの，平瓦には厚手で軒平瓦と考えられるものが数点ふくまれていた。伴出する土器から８世紀後半の瓦溜めと考えられる。

ＳＫ302　　ＳＫ301の北にある長円形の土壙で，やはり瓦溜めである。ＳＫ301と同様に丸瓦・平瓦が投げ込まれているので，同時に掘削されたものであろう。

３）寺院造営前の遺構

ＣＮ54区の溝　　斜行する溝，幅160cmで上・下２層の２時期あり，古溝は深さ65cm，新溝は深さ40cmである。古溝では土師器を多く出土した。

４）８世紀後半以降の遺構

ＳＫ307　　ＳＢ310の北にある長円形の土壙である。焼土・鉱滓・るつぼの底などが出土している。鍛冶の跡であろう。

ＣＮ54～ＣＰ54区の小穴群　　ＳＫ303の南は遺構面が約10cmほど下がる。この10cmほどの層は瓦片を多く含んでいて，ＳＫ301・ＳＫ302の埋土に似ている。瓦溜めを掘削した時期に一度整地をして地均しをしているのであろう。この層を除去すると小穴を多く検出した。まとまりがなく性格は不明である。

５）時期不明の遺構

ＳＤ312　　ＣＪ59にある折れ曲った溝である。この溝の一部は深く，埋土から古式土師器が出土している。

ＣＯ60～61区の掘立柱建物　　ここで４つの掘立柱穴を検出した。柱掘形は隅丸方形で一辺が45cm～60cmである。規模不明の建物であるが，東の発掘区には対応する柱穴は検出されず，北か南に延びる可能性はある。　　（上野邦一）

６）ＤＪ～ＤＭ55・ＤＨ48～51・ＢＪ～ＢＲ63トレンチ

ＤＪ～ＤＭ55トレンチ（第７図）

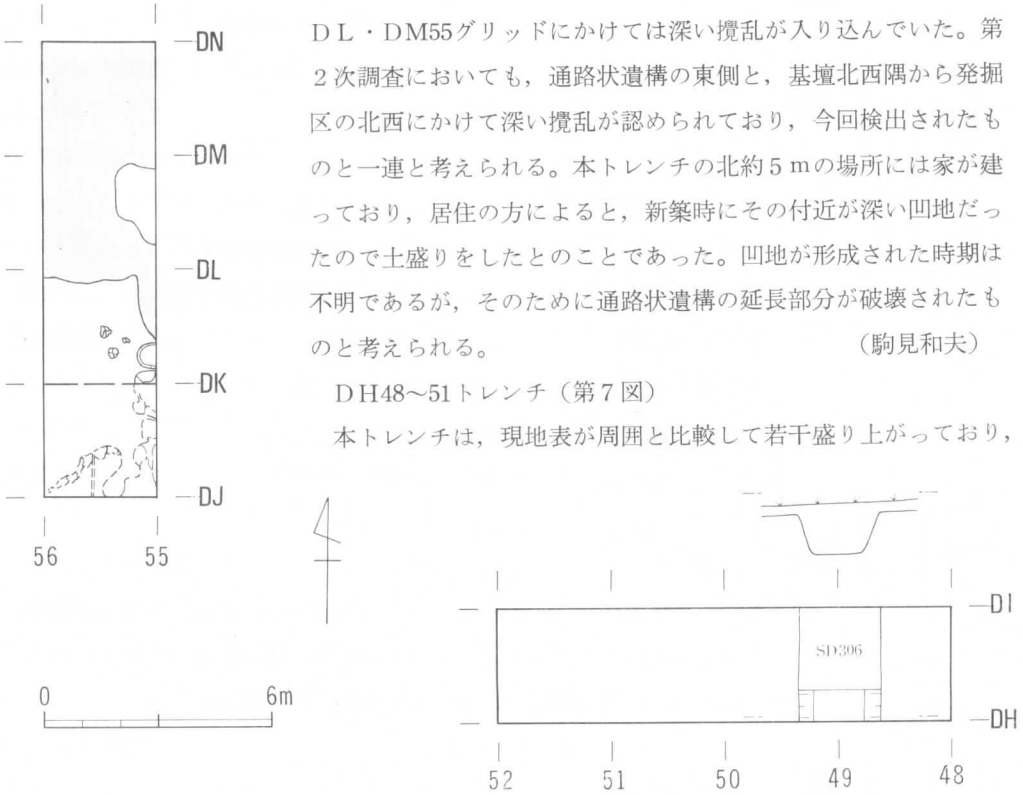
本トレンチは，第２次調査で基壇北辺の中央付近から北へ延びる状態で検出された，通路状遺構の延長を確認するために設定したものである。ＤＪ55グリッドは第２次調査においてすでに発掘した部分ではあったが，通路状遺構の連続性をそこなわないようにするため，前回埋め戻しの際に遺構保存の目的で敷いた浜砂の面まで掘り下げた。

今回新たに発掘した部分では，ＤＫ55グリッドの南東部において，通路状遺構の延長と考えられる硬砂岩が散在しているのが認められた。遺存状態は極めて悪く，前回ＤＪ55グリッドで

検出されたものと比較して非常に不明瞭な状況であった。また，ＤＬ・ＤＭ55グリッドにかけては深い攪乱が入り込んでいた。第２次調査においても，通路状遺構の東側と，基壇北西隅から発掘区の北西にかけて深い攪乱が認められており，今回検出されたものと一連と考えられる。本トレンチの北約５ｍの場所には家が建っており，居住の方によると，新築時にその付近が深い凹地だったので土盛りをしたとのことであった。凹地が形成された時期は不明であるが，そのために通路状遺構の延長部分が破壊されたものと考えられる。（駒見和夫）

ＤＨ48～51トレンチ（第７図）

本トレンチは，現地表が周囲と比較して若干盛り上がっており，



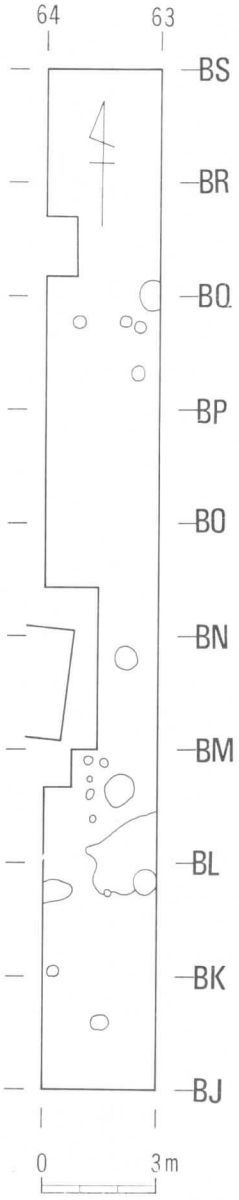
第７図　ＤＪ～ＤＭ55トレンチ・ＤＨ48～51トレンチ実測図（スクリントーンは攪乱部分）

その部分だけが村の共有地という特別な扱いで，かつ祠が設けられていることなどから，何らかの遺構の存在を予測して設定したものである。

しかし，木根等の攪乱が著しく，溝（ＳＤ306）のみの検出にとどまらざるを得なかった。ＳＤ306は，上場2.15m，下場1.3m，深さは遺構確認面から1.05mを測り，溝底面は概して平坦である。南壁断面を見ると，土層はレンズ状の堆積を呈しており，最下部に黄褐色土の薄層（Ⅰ層），その上に古式土師器片と炭化物を含む黒色土が厚さ約15cmの層（Ⅱ層）をなし，さらにその上に明黄褐色土（Ⅲ層），明茶褐色土（Ⅳ層），明茶褐色土（Ⅴ層），暗茶褐色土層が順々に堆積している。そしてⅡ層以外からは遺物が認められない。したがって，ＳＤ306はⅡ層の時期にその機能をはたしていた可能性が強い。

ＢＪ～ＢＲ63トレンチ（第８図）

本トレンチは，横滝山の台地南側にある小丘上に設けたものであるが，地表面から地山面まで5cm程の深さしかなく，かなり削平されているようであった。遺構らしきものの存在は認められなかった。（駒見和夫）



第８図　ＢＪ～ＢＲ63
トレンチ実測図

7）小　結

ＳＤ310は木造基壇外装を持つ，瓦葺の礎石建物と推定される。これまでの鴟尾の出土や今回の塼仏の出土は，建物遺構と直接関連しての出土ではないが，この一帯に寺院が造営されていたことを裏付け，ＳＢ310が寺院の一堂舎であることは間違いあるまい。寺院の造営時期は確定できないが，寺院と関連する出土遺物から７世紀末頃の寺院と考えられる。

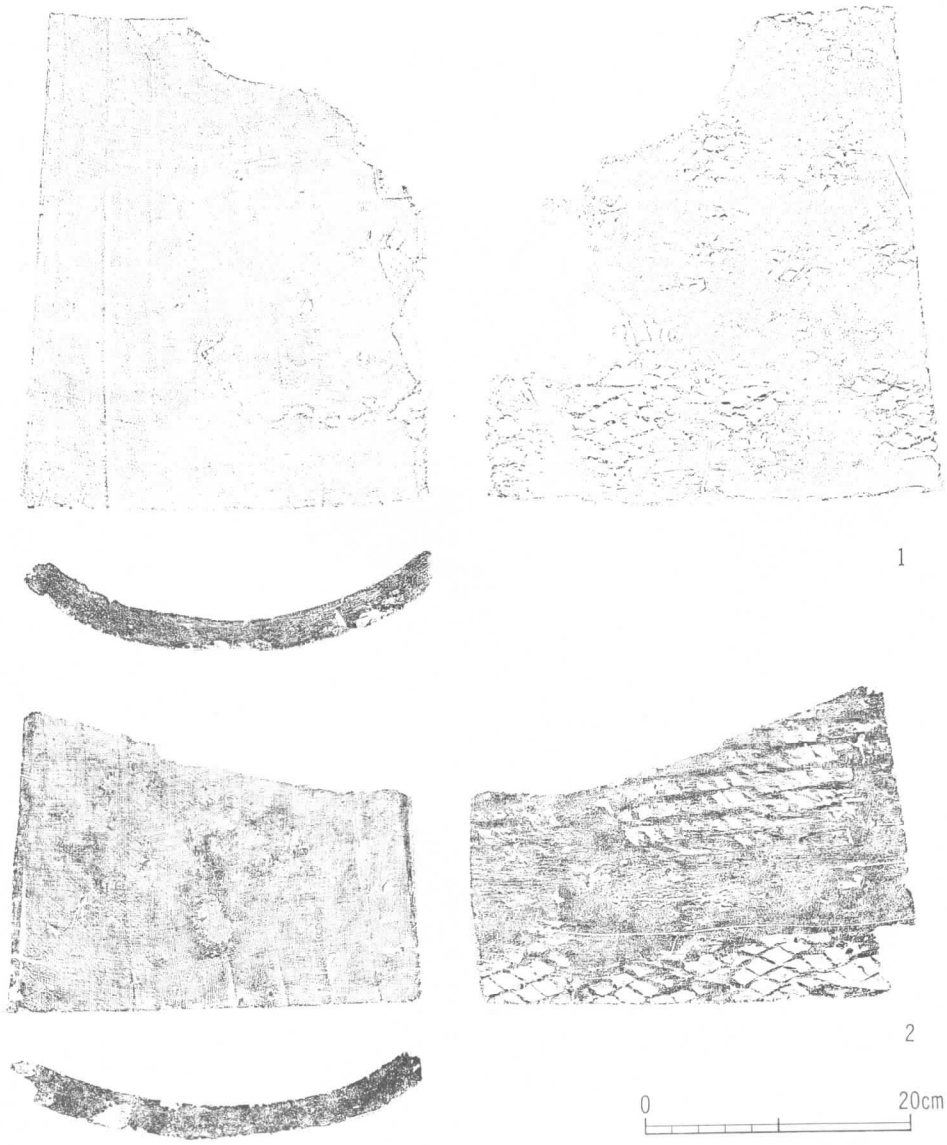
伽藍を想定する根拠が乏しいので，ＳＢ310が伽藍のうちのどの建物であるのかは決めがたい。この建物は平坦地のほぼ中央にあり，門と想定するのは無理であろう。ＳＢ３10を門として，この北か南に伽藍を想定すると伽藍が平坦地の北か南に著しく片寄ってしまうからである。平坦地のほぼ中央にあるので，ＳＢ310は金堂ではないかと推定されるが，塔である可能性も否定できない。今後の発掘調査によって建物の性格は決定できるであろう。

寺院廃絶後はこの一帯は広く整地が行われていると考えられる。瓦の出土はＳＫ301・ＳＫ302の瓦溜めとＣＮ54区～ＣＰ54区の凹みに集中している。基壇の削平，整地，瓦溜め掘削は一連の作業とも考えられるが，寺院廃絶の時期と関連し，この点も今後の発掘調査の課題である。

（上野邦一）

Ⅳ　出土の遺物

今次調査において出土した遺物には，多量の丸・平瓦をはじめ，軒平瓦と考えられる瓦類のほか，須恵器，土師器，縄文土器，石器，玉作遺物等があり，また断片ながら，既採集の鴟尾と共に本遺跡の性格を窺う重要な手掛りとして塼仏が出土し，注目された。



第9図　平　　瓦　　拓　　影

（1）　瓦　類

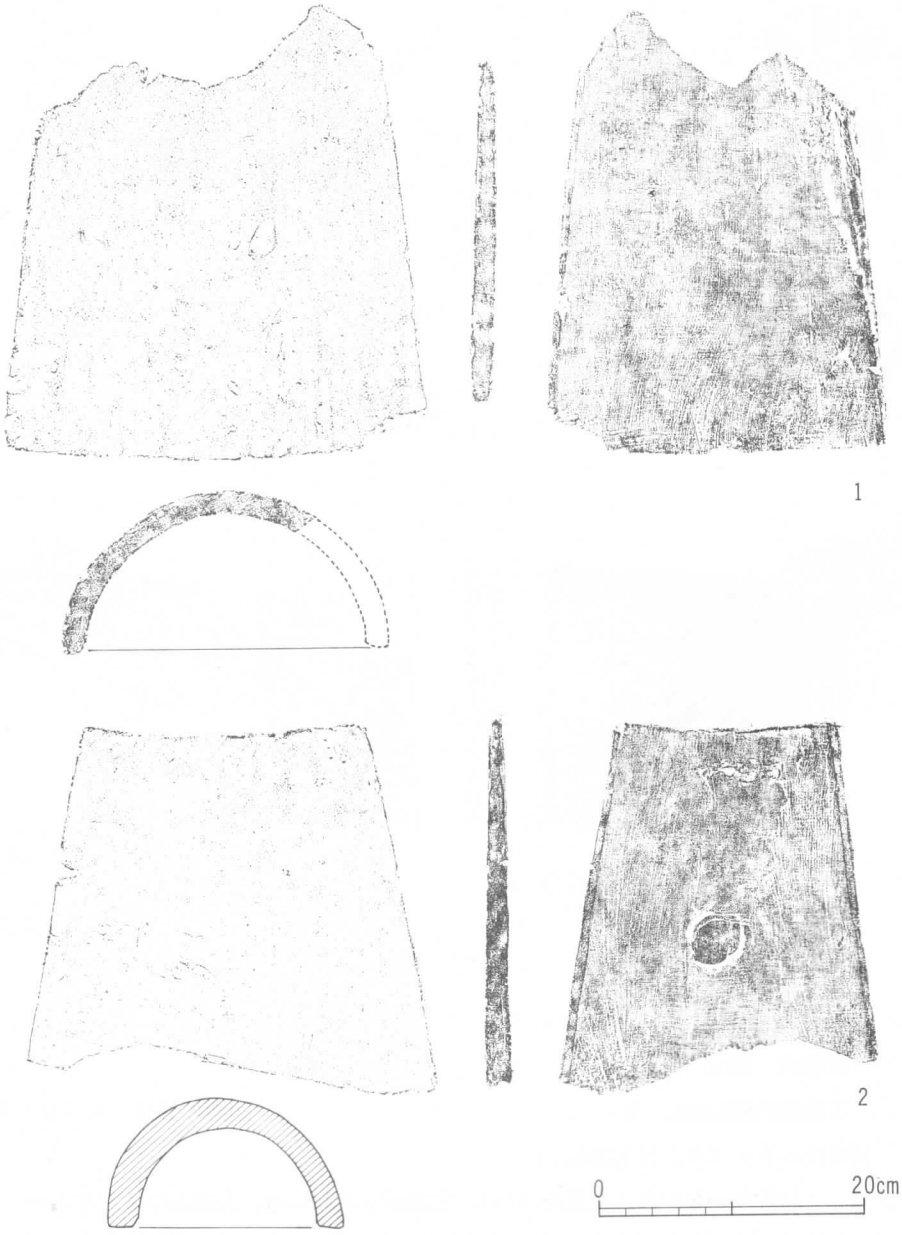
台地中央西側北寄りの瓦溜め遺構ＳＫ301，ＳＫ302より45×30×16cmのコンテナーで約60ケース分の丸・平瓦が出土した。丸瓦，平瓦はともに既往の調査で確認されているものと成形，調整技法など，全く同じであるが，新知見として平瓦の中に軒平瓦と考えられる厚手のものが数点含まれていた。

以下，昭和51年の第１次調査以前採集の軒丸瓦と鴟尾についても今回新たな観察を行ったので，その報告も兼ねる。

１）平瓦（第９・10図，図版九・十）

第10図　平　瓦　拓　影

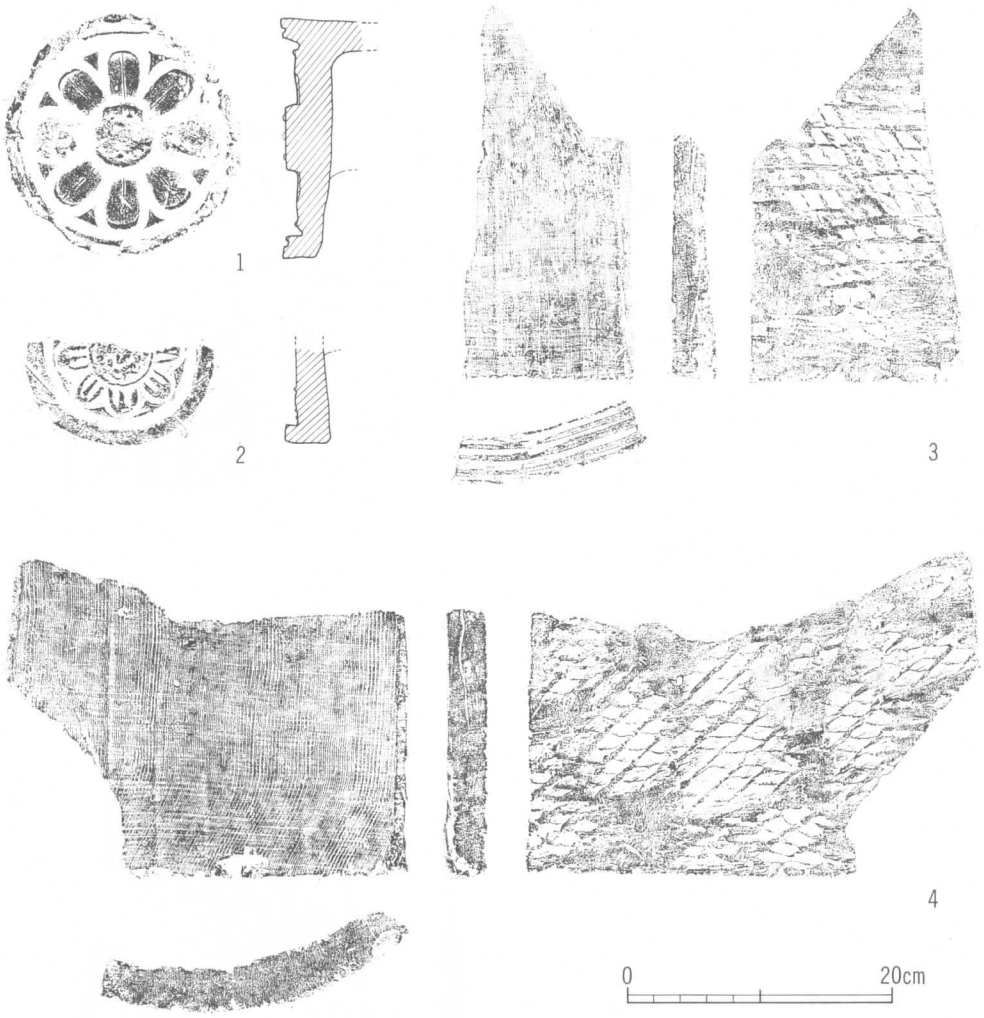
出土瓦類の約80％を占め，完形をうかがうものも若干ある。凹面（外面）に例外なく幅3.5～3.7cmないし5cm前後の模骨痕が認められ，これまでに出土し，採集されているものと同様，すべて粘土板桶巻き作りにより成形し，四分割して仕上げたことが知られる。凸面（裏面）に残る圧痕から第2次成形には斜格子の刻線叩き目と縄叩き目の二種が用いられているが，前者の刻線叩き目が圧倒的に多く，全体の90％以上を占める。斜格子叩き目は，第2次調査概報でも報告されている通り，2～5mmの太い凸線により区画された一辺1～1.5cmの彫りの深いⅠ類と，2～4mmと1～3mmの凸線により一辺0.9～1.4cmの若干小さい菱形を区画したⅡ類の二種がある。また模骨の桶抜きに際し，凹面に残る布目は，ほとんど経糸を端面に平行して用い，3cmの単位面積中における経糸と緯糸の本数には24～27×26～27本の比較的粗いA類と25～27本×34～36本の比較的細かいB類の二種がみられる。量的にはB類が大半を占める。成形後の調整としては，側面，端面にヘラケズリ，凸面にケズリとナデの手法を併用する。焼成は須恵質に硬く焼きしまったもののほか，灰白色でやや軟かいものなどがあり，胎土



第11図　丸　瓦　拓　影

は，全般的によく選ばれている。

第９図１（図版九―１）は，ほぼ全形が窺えるもので全長37cm，広端面幅31cm，同厚さ2.6cm，狭端面幅推定28.5cm，同厚さ2.1cm。凸面はⅡ類の斜格子刻線で叩き締めたのち，ヨコナデで調整し，叩き目の大半を消し去る。凹面に残る布目痕はＢ類，模骨痕の幅は3.5～3.7cm



第12図　軒丸瓦（1・2），軒平瓦（3・4）拓影

である。両端面，側面はきれいにヘラケズリ調整する。ＳＫ301出土。同図２は，狭端側を欠くもので，広端面の幅32cm，厚さ2.5cm。凸面にⅡ類の叩き目，凹面にＢ類の布目痕を残す。端面，側面はヘラケズリ。ＳＫ301出土。

第10図１（図版九―２）は，全長38.5cm，広端面厚さ2.8cm，狭端面厚さ2.5cmあり，凸面をⅠ類の斜格子刻線で叩き締める。布目痕はＢ類，幅3.5～3.7cmの模骨痕が明瞭に残る。凸面はヨコナデで仕上げ，両端面，側面はヘラケズリ調整。ＳＫ301出土。

第10図２（図版十―１）は，出土量がきわめて僅少であるが，凸面に縄叩き目を残す例で，広端面厚さ2.3cmの，狭端側を欠く破片である。左撚りの縄巻叩き板を用い，縦・斜位の第２次成形を行ったのち，ヨコナデ，ケズリ調整を加える。凹面の布目痕はやや粗いＡ類，幅3.5cmの模骨痕が残る。端面，側面はヘラケズリ。ＳＫ301出土。

2）丸瓦（第11図，図版十）

すべて行基式丸瓦で，全長38cm前後に復原される。凸面の調整や分割面の面取りなど，全体にていねいな作りを示し，凸面の第２次成形の叩き目は，縦位のヘラケズリとナデにより消され，全くその痕跡をとどめない。

第11図１（図版十―２）は狭端側，同図２は広端側を欠くもので，広端面幅21cm，厚さ1.9cm，狭端面幅12.5cm，厚さ1.3cmを測り，いずれも凹面にＢ類の細かい布目痕を残す。ともに青灰色をした焼成堅緻なもので，ＳＫ301出土。

3）軒丸瓦（第12図，図版十一）

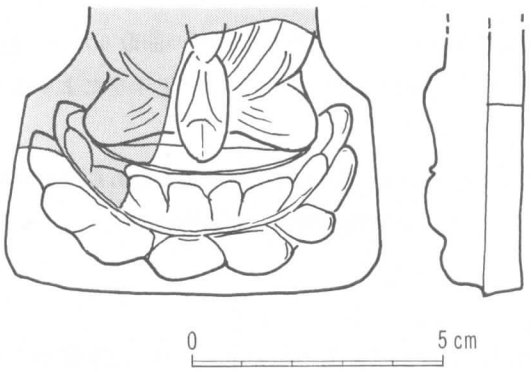
古く明治年間に採集されたもので，２種あり，いずれも楔形の間弁をあらわす高句麗系の素弁８弁蓮華文軒丸瓦である。第12図１（図版十一―１）に示した軒丸瓦１類は，丸瓦部を欠くが，瓦当部はほぼ完形で直径18cm，弁区径13cm，弁幅2.5cm。蓮弁は弁央に細い稜線を通し，弁端は反転，弁間に楔形の間弁をあらわす。中房は径５cm，高さ0.8cmの凸形をなし，欠失部があって明確さを欠くが，１＋６の蓮子を入れるものと推定される。外区は広さ1.5cm，高さ1.4cmあり，周縁に不整な一重圏をめぐらす。瓦当裏面はナデ調整，丸瓦部との接合法は不明である。胎土は緻密で，須恵質に硬く焼きしまっている。同図２（図版十一―２）の軒丸瓦２類は，瓦当部上半を欠く，直径約13.5cmの小形品である。素弁の８弁蓮華文，弁央の稜，楔形の間弁は，いずれも線的な扁平な表現で，先の軒丸瓦１類が著しく簡略化したものと考えられる。弁区径9.5cm，弁幅1.5cm。中房は圏線で囲まれ，平坦で径4.5cm，蓮子は風化して不明である。胎土，焼成とも良好。

4）軒平瓦（第12図，図版十一）

他の平瓦に比べ厚手に作られたもので，瓦当文様を表現したとみられるものと無文の２種がある。第12図３（図版十一―３）の軒平瓦１類は，狭端側を欠くが，広端面の厚さ4.6cmあり，端面に浅い四条の凹線で重弧文風の文様をあらわしている。上記軒丸瓦１類とのセット関係が考慮される。凸面にⅡ類の叩き目，凹面にＢ類布目痕を残す。側面はヘラケズリで，ＳＫ301出土。無文であるが，同図４（図版十一―４）に示した２類も広端面の幅が3.7cmと，他のものより１cmあまり厚く，やはり軒平瓦として使用されたと考えられるものである。広端面幅推定34cm，凸面にⅡ類の叩き目，凹面にＢ類布目痕と幅3.5cm前後の模骨痕をとどめる。端面ヘラケズリ。ＳＫ301出土。

5）鴟尾（図版十二）

調査前に採集された大小５片と第２次調査で基壇遺構の周辺から小破片２個が出土している。腹部とのとりつき部（図版十二―４），胴部の右側面（同―３），背稜を含む胴上部の破片（同―1・２）等があるが，全形を窺うにはなお不十分である。胴部外面にヘラで幅1.5cm前後の狭い凹線を斜位に削り，中に１条の沈線を入れて，粗い段型をあらわし，鰭部の腹部は無文で，縦帯は作らない。背稜部にはヘラケズリにより約４cm幅の平坦面を作る。胴部，鰭部の厚さ



第13図　塼仏実測図（アミ部分推定）

4 cm，腹部は厚さ3.7cmあり，鰭に近い胴側面の下方に半円形，また腹部の基底に半円形の刳り形がみられる。胴・腹部内外面とも粗いナデで調整，胎土中に粗砂粒を混じえ，硬い焼きで須恵質をなす。

以上，瓦類について記してきたが，古くから知られている高句麗系の素弁の8弁蓮華文軒丸瓦1類は，福井県武生市の深草廃寺や富山県高岡市の御亭角遺跡など，北陸地方に点々とみられる型式で，白鳳様式に属し，出土土器の型式とも併せ考えると，白鳳後期の7世紀後半に比定できる。これとセットをなすとみられるのが，軒平瓦1類である。典型的な重弧文とはいえないが，浅い凹線で四重弧文をあしらい，様式的に軒丸瓦1類との組み合せに矛盾はない。瓦溜め遺構をはじめ各調査区から出土している丸・平瓦，また鴟尾も胎土，焼成，その他からこの軒丸・平瓦1類と同時期の所産と考えたい。

なお，小形の軒丸瓦2類は，平安期に位置付けられ，大きさからみて茅葺き等の建物の甍飾りに用いられたとも考えられる。ただし，これとセット関係をなす軒平瓦，丸・平瓦はいまのところ明確でない。（前島己基）

（2）　塼　仏（第13図，図版十一—4）

後世の耕作に伴うSD304から検出されたもので，蓮台上に結跏趺坐する如来形を半肉彫りした独塼仏の下半部断片である。両手を衣で隠した化仏の形をとり，膝張り4.6cmを測る。衣は扁袒右肩とみられる。粗略な表現であるが，反花と受花からなる蓮台は幅6.5cm，高さ正面で2.6cm，奥部で3.5cmある。ヨコ7.5cm，タテ残存長5.5cmで，厚さ0.7cmの薄い長方形の粘土板上に蓮台部で1.3cmあまり盛上げて成形し，側面はヘラケズリ，裏面は粗いナデで調整する。胎土は精良で，塼面，裏面とも黒色に焼き上っている。

なお，壁面などに嵌め込むために施されたものであろうか，残存する向って右長側下方に焼成前に削り取られた弧形の刳り方がある。

軒丸・平瓦1類とほぼ同時期のものとみて大過なく，鴟尾と共に本遺跡における本格的な古代寺院跡の存在を裏付ける物証として貴重な意義をもつ。また従来，北陸における塼仏出土地は福井県武生市野々宮廃寺が北限であったが，このたびの検出でそれがさらに北上し，当地まで及んでいることが明らかになったことも意義深い。（前島己基）

（3）土　器（第14図，図版十三―1～6）

出土した土器は，土師器と須恵器である。図示した土器の出土個所は，遺構内のみならず，表土層中，表採のものも含む。以下歴史時代の土器から紹介する。

1）土師器

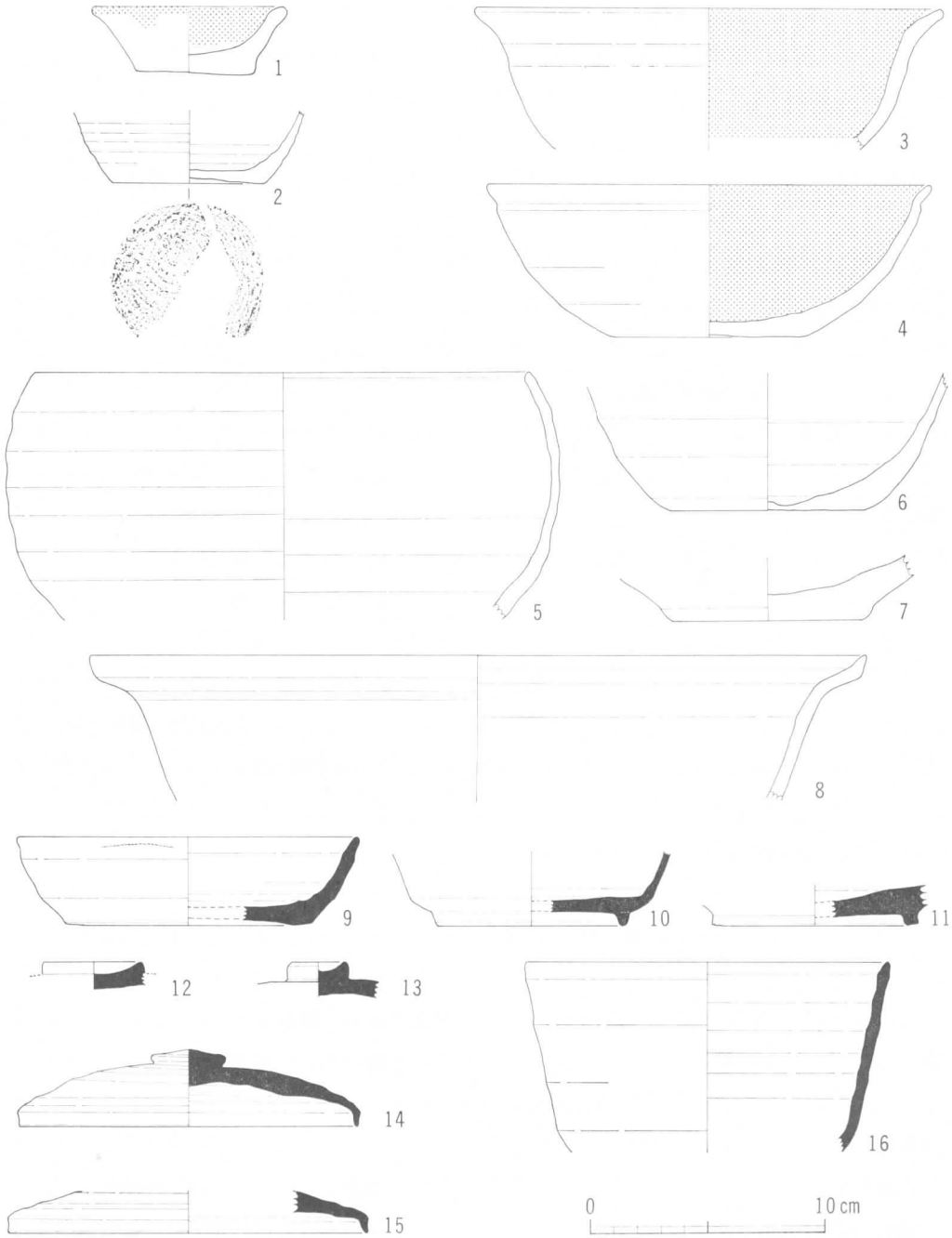
器種は坏（1・2），鉢（3～5），埵（8）などがある。図示したのはすべて遺構からの出土で，1・2・5は瓦溜め（SK301），3は溝（SD305），4・7は土壙（SK307）である。

1は口径8.4cm，高さ2.8cm，底径5.2cm，小形ながら肉厚のつくりである。内側ほぼ全面に黒漆模の付着があり，食器としての使用ではない。2は内彎気味の体部を呈して，底部は平底やや凹底となっている。体部内外面には水挽き整形痕が顕著にあり，底部切り離しは回転糸切りである。3～5の鉢は形態に差があり，とくに5はタイプを異にする。3は口径（推定）20.1cm，底部を欠損するものの体部下半にやや張りを持たせ，さらに口縁部を緩やかに長く外反させている。底部は丸底に近い平底となろうか。これに比して，4は口径19cm，高さ6.6cm，底径8cmを測り，体部下半の張りなく体部上位でわずかにくびれて，小さく短く外反した口縁部を呈している。底部は平底である。調整痕の明瞭な4は，体部内外面箆磨き，平底の底部に箆削り痕がある。また，3・4については，いずれも内面黒色処理が施されている。5は口径（推定）21，2cm，完存品ではないが，所謂鉄鉢型と考えられるものである。体部は鉄鉢型特有の内彎曲線を呈しているものの上位に屈折なく，また内彎度も弱い。底部は欠損のため，平底乃至丸底風か不明である。外面には水挽き整形痕がいちぢるしい。8は口径（推定）33.1cm，損傷いちぢるしく細部は不詳であるが，口縁部は体部上位で屈折外反し，さらにその端部をつまみ上げて断面三角形様を呈しているものである。6・7は体部下半から平底の底部である。いずれも底部には回転糸切り痕を認める。

2）須恵器

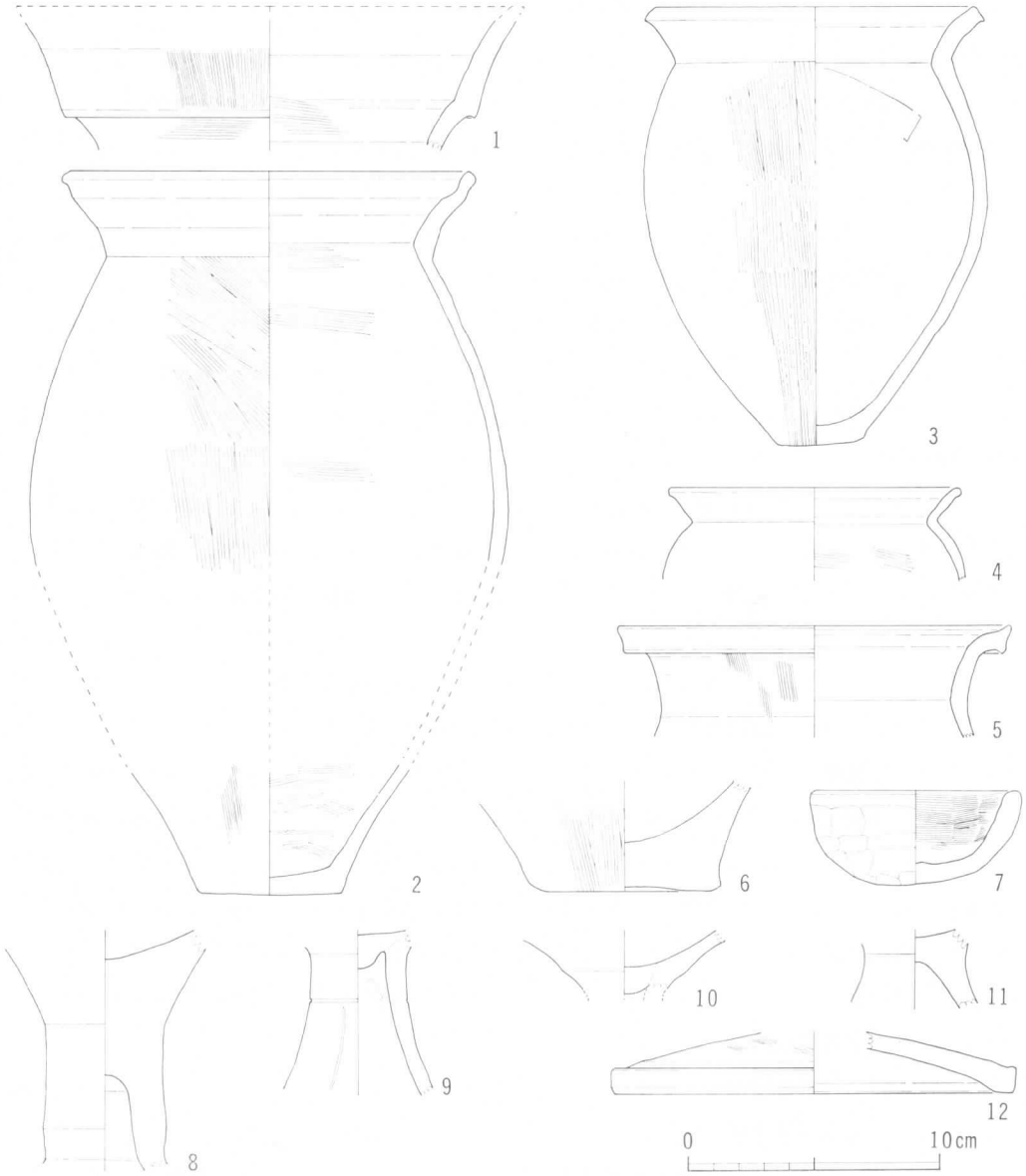
器種は坏（9），高台付坏（10・11），坏蓋（12～15），鉢（16）がある。このうち遺構からの出土は16（SK301）のみである。

9は内彎気味に立ち上がる体部を呈し，底部は平底である。推定ではあるが，口径14.6cm，高さ3.8cm，底径10.4cmを測り，口径に対する底径の比値は高い。底部には回転箆削り痕がある。10は体部下半のみで，外傾気味に立ち上がり，底部は平底を呈している。水挽き整形。底部外縁には高さ約6mm，幅約6mmの高台を貼り付けている。この端部は単に丸くおさめており面をなしてはいない。11は底部のみで，回転箆削り調整したのち，やはり外縁部に高さ約5mm，幅約7mmの高台を貼り付けている。接地面は内端面にある。10・11の高台はいずれもふんばりを失って小形化したものである。12・13は輪状つまみ部分のみであるが，いずれもその凸面には墨痕があり，その使用法が窺測される。14は丸味をもつ平坦面のない天井部に偏平化した宝珠つまみを付したものである。蓋内面にはかえりなく，単に口縁端部を下方に屈折させたものである。口径14.5cm，高さ3.3cmを測り，口縁部の屈曲の稜が最大径（14.7cm）



第14図　土師器・須恵器実測図（1～8土師器，9～16須恵器）

となっている。調整は水挽き整形であるが，つまみ周縁部は回転篦削りのままである。15は天井部を欠損するが，14と同様の傾向を呈している。16は底部を欠くため復原ではあるが，体部は本来もこの程度の傾きであったと思われる。水挽き整形。



第15図 土 師 器 実 測 図

歴史時代の土器については以上の様であり，第1・2次調査の成果と同じく量的には僅少であった。ただ，器種では以前の調査では得られなかった鉢，埚などがあり，またそれらが瓦溜め，土壙，溝といった遺構から出土したという点に今次の新しい成果がある。とくに，鉄鉢型と称される5の土師器鉢は破損品とはいえ注意に価する。というのは，この種の土器は藤原宮址・平城宮址など中央官衙址の調査報告からすれば，中央においては差程の量を得ているものではなく，また須恵器がほとんどで日常的普遍性を有するものではないようだからである。このこ

とは，本遺跡の性格を考える上で重要な資料となろう。次に年代観については，凡そ８～９世紀代に及ぶものであり，概ね１・２次調査の成果と傾向を同じくする。ただ古相を示唆するものもあり，個別的にあえて言えば，土師器３の鉢，須恵器14の坏蓋などは形態的特徴より，その生産期，使用期を考慮して大略８世紀初頭を中心に前後する展開を考えてよかろう。

（千家和比古）

（３） 古墳時代の土器（第15図，図版十三―７～10）

古墳時代の土器はいずれも古式土師器の範疇に含まれるもので，遺跡内の広い範囲において検出された。しかし，出土量は少なく，また明確な遺構に伴うものはない。第１・２次の調査においても当該期の土器の出土をみており，今回新たに得られたものは，これまでの資料をさらに補強するものとなろう。

１は壺の口頸部で，ＳＫ301の瓦溜めより出土したものである。口縁端部は欠損しているが，口径は推定20cm前後を測る。有段口縁を呈し，口縁部は外反気味にひろがる。器面の調整は，頸部内外面に横位の刷毛調整が，口縁部外面には縦位の刷毛調整が施されている。胎土は雲母と石英を含み，外面にはススが付着している。

２～６は甕で，２・３・５はＳＤ312から，４・６はＳＫ301の瓦溜めから出土したものである。２は胴部上半から口縁部にかけてと底部付近の破片であるが，同一個体と考えられるので図上において復原したものである。口径16.4cm，底径5.7cm，器高は推定28.6cmを測る。最大径はやや長胴気味の胴部中位に有する。頸部は「く」字状に屈曲し，内面には鋭い稜が形成されている。口縁部は内面がいったん凹んだ後，端部で肥厚し丸くおさまる。底部はひろめの平底を呈している。器面の調整は，外面は肩部で斜位，胴部以下には縦位の刷毛調整が施されており，内面は横位の刷毛目が残る。胎土は多量の砂粒を含み，暗褐色を呈する。

３は小形の甕で，口径13.4cm，底径３cm，器高17.3cmを測り，最大径は胴部中位に有する。頸部は「く」字状に屈曲し，内面には鋭い稜が形成されている。口縁部は端部が横ナデされ面をなし，断面三角形を呈する。底部は小さな平底をなす。器面の調整は，胴部外面が縦位の刷毛調整で，内面はヘラナデが施されている。胎土は雲母を含み，暗褐色を呈する。

４は小形甕の口頸部で，口径は推定11.6cmを測る。頸部は「く」字状に屈曲し，内面に稜が形成されており，口縁部は端部が丸くおさまる。器面の調整は，外面は磨耗が著しいため不明であるが，胴部内面には横位の刷毛目が残る。胎土は小石・砂粒を多量に含み，淡黄白色を呈す。

５は甕の口頸部で，口径は推定15.6cmを測る。頸部はゆるく外反し，口縁部に至ってつまみ出しにより強く外反して断面三角形の口縁帯をつくっている。頸部外面には縦位の刷毛目が認められる。胎土には角閃石を含み，淡黄橙色を呈する。

６は甕の底部で，底径は7.6cmを測り，広く安定している。器肉は厚く，外面には縦位の刷毛調整が施されている。胎土は多量の砂粒と雲母を含み，淡褐色を呈する。

7は埦で，ＣＲ56の覆土中より出土したものである。口径8.4cm，器高3.8cmを測る。器肉は厚く，外面はヘラ削りにより面取りがなされ，内面には横位の刷毛調整が施されている。胎土には石英・雲母を含み，黄褐色を呈する。

8～11は高坏の脚部片で，8はＳＫ301の瓦溜め，9・10はＳＤ312から出土，11はＣＨ54で表採したものである。8は棒状の脚部で，脚部から坏部にかけてはゆるやかにひろがる。器肉は厚く，胎土には多量の砂粒と石英を含み，にぶい黄褐色を呈する。

9は裾部に至るにしたがいやや開脚するタイプで，脚部と坏部の接合部にホゾを有する。脚部外面には横位に廻る沈線と，縦位の沈線が認められ，ヘラ磨きで仕上げられている。胎土には砂粒を多量に含み，淡い黄橙色を呈する。

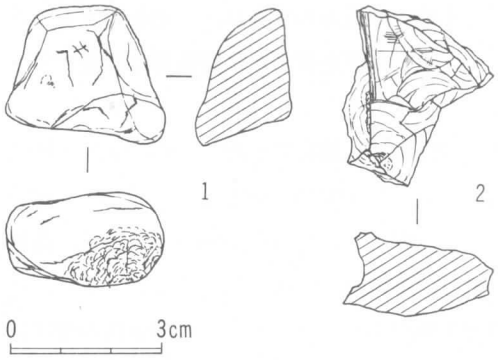
10は坏部がラッパ状にひろがるもので，脚部と坏部の接合部にホゾを有する。坏部内面にはヘラ磨きが施されている。胎土には雲母を含み，暗茶褐色を呈する。

11は裾部が「ハ」字状にひろがるタイプのもので，坏部内面にはヘラ磨きが施されている。胎土は砂粒を多量に含み，明茶褐色を呈する。

12は裾部片で，器種は器台と思われる。ＣＰ54から出土したもので，裾径は推定16cmを測る。裾部は大きくひろがり，端部は面をなす。器面の調整は，外面に刷毛調整が認められ，また裾端部には赤色塗彩が施されている。胎土は比較的精選されており，黄白色を呈する。

以上，今回出土した古式土師器を通観すると，概ね従来の北陸土師器第Ⅱ様式の範疇に含まれるが，1の壺口頸部や8の棒状の高坏脚部，12の器台裾部など北陸土師器第Ⅰ様式にさかのぼる感のあるものも出土している。この傾向は第1・2次の調査においても指摘できる。本地域における古式土師器の様相はこれまで不明瞭の部分が多かったが，近年西蒲原郡巻町の大沢遺跡や刈羽郡西山町の内越遺跡等から良好な資料が得られ，該期の土器様相とその変遷が把握されつつある。しかし，これらの古式土師器は第Ⅰ様式を中心とするもので，それに続く第Ⅱ様式は未だに資料が著しく乏しい。そうした中で，本遺跡出土の第Ⅱ様式を中心とする土器群は，古式土師器の連続した変遷を知るうえで，また該期の遺跡のあり方などを知るうえにおいて極めて貴重な資料と言えよう。

（駒見和夫）



第16図　硬玉原石(1)，玉作関係遺物(2)実測図

（4）　**その他の遺物**（第16図）

1）硬玉原石

ＣＭ59グリットの表土層中より硬玉原石1点が出土した。3.4×2.8×1.9cmの漂石で，アルビタイトを含んでいるが，緑色部が多く，かなり良質のものである。以前，本地点の近くより縄文時代晩期の土器が出土しているので，当該期に関係するものと思われる。

2）玉作関係遺物

ＣＯ54グリットの第Ⅱ層より，施溝痕を有する剝片が１点出土している。淡緑色であるが，かなり良質の緑色凝灰岩である。県内の玉作遺跡の通例からすれば，弥生時代に属すものと思われる。なお，弥生式土器片若干が，古く本台地上より採集されている。　（寺村光晴）

Ⅴ 結　語

以上，昭和58年度における横滝山遺跡の調査結果について，それぞれを記述した。これを概観すれば次の通りである。

遺構では，木造基壇外装をもつ瓦葺の礎石建物と推定されるＳＢ310を検出した。これは寺院の堂舎の一つと考えられる。また，礎石抜き取り穴と思われるＳＫ303が検出され，付近に礎石を有す建物の存在が想定された。さらに多量の瓦類をともなう瓦溜め２を検出した。遺物では塼仏，軒平瓦を新たに検出した。遺構については，トレンチ内の検出のため性格等を明瞭にするまでには至っていない。出来得るならば，つづいての調査が望まれる。

遺物については，新たに検出した軒平瓦は，既採集の素弁八弁蓮華文の軒丸瓦とセットするものと考えられ，従来出土の鴟尾とも関連し，ともに本跡において同一時期に使用されたものと推察される。そして，上記の遺構と出土遺物は相互に密接な関係を有するものと考えられ，塼仏の出土等から，それは寺院跡としての蓋然性がきわめて強い。

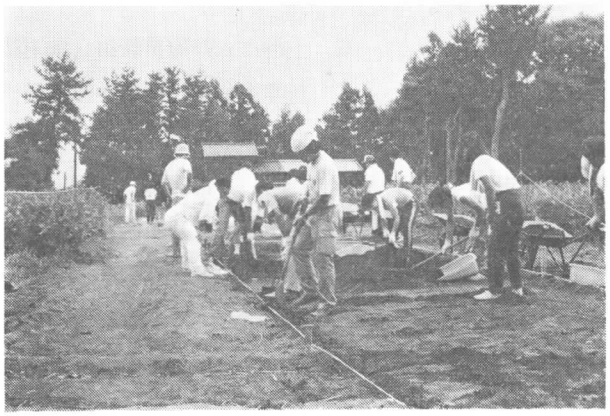
従来，漠然としていた「コシ」が，越前，越中，越後の三越に分立するのは，「越前国司獻二白蛾一」とはじめて三越の中の越前国の名がみえる持統天皇６年（692）のころであろう。同じ持統天皇３年(689）正月，７月の記事には未だ「越」とあるから，おそらくこの間に三越の分立があったであろうと推察されている。とすれば，689年以前は「コシ」の段階であるので，横滝山遺跡が７世紀末の寺院跡とすれば，それは官寺的なものより私寺（氏寺）的なものと考えた方がよい。ところが，本地域および周辺地域には，現状では私寺造営の背景をなすような後期・終末期古墳の存在は認められていない。また，有力豪族の存在も現状では検されていない。とすれば，「コシ」の段階に属す時期における本地での氏寺の存在は，一考を要することになる。なお，この段階で官寺が存在するとすれば，それは渟足柵または磐舟柵に関連するもので，その所在の地は横滝山の地ではなかろう。

「越後」の初見は，文武天皇元年（697）12月の「庚辰，賜二越後蝦狄物一，各有レ差」(『続日本紀』）で，同２年にも越後国の名がみえている。ところが，697年の越後国は，大宝２年(702）の「分二越中国四郡一，属二越後国一」以前である。この四郡については諸説があるものの，蒲原郡が含まれていることについては諸氏の見解が一致し，ほぼ動かし難いもののようである。とすれば，越後国は現在の阿賀野川，信濃川流域以北の地である。すなわち，本横滝山の地は越中国に属しており，しかも越中国の最北端に位置するということになる。横滝山廃寺が官寺で

あるとすれば，国の最北端の地に，これを建立する必然性を現状では見出すことができない。

大宝２年(702)「分二越中国四郡一，属二越後国一」の越中国四郡の越後国への併合は，後の出羽国を除けば，越後国の境域が現在のようにほぼ定まったといってよい。すなわち，現在の山形県を含み頸城郡以北が越後国である。この時点で，横滝山の地ははじめて越後国に属し，かつ越後国のなかにおける地理的位置は，国のほぼ中央乃至中央より若干南にあるということになる。横滝山の廃寺が私寺でなく官寺であるとすれば，この時点にその建立の蓋然性が最も強くなるものと考えられる。したがって，本横滝山廃寺の建立時期を求めるとすれば，現状における出土遺物は様式的には７世紀後半乃至終末ころに比定されるようであるが，上記の観察からして，702年を遡らないものと思われる。

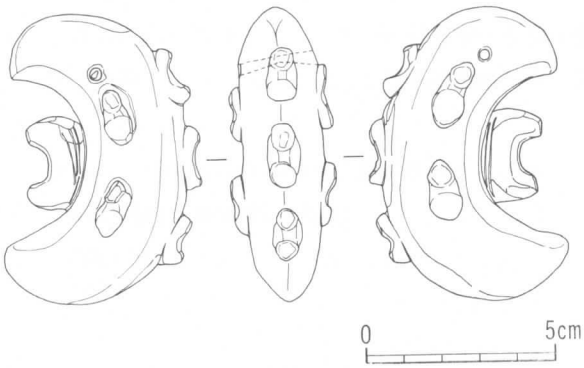
以上，一つの仮説を提示し，今後の研究及び調査への参考に供したい。なお，関連する詳細については，別に「初期越後国府・越後城の所在について」（国学院高等学校紀要・小林武治先生喜寿記念号，昭和59年３月刊）があるので，被見して頂ければ幸いである。　　（寺村光晴）



VI 付　　篇

子持勾玉（第17図）

横滝山出土とされる子持勾玉に関しては，寺村光晴・久我勇両先生により紹介済みであるが[1]，今回実測の機会を与えられたので報告しておきたい。



第17図　子持勾玉実測図

本例は両端が尖り全体的にバナナ状を呈し，背部に３個，両側面に２個ずつ，腹部に１個の突起を有する。子持勾玉の突起は，その名称通り勾玉に小勾玉状のものが付されたと考えられているが，本例を見ると突起と本体の接合部分を削り込み，突起を小勾玉状に仕上げているわけではない。背部・側面部の突起は長さ1.6～1.8cm，高さ0.4～0.5cm，厚さ0.8～0.9cmである。腹部の突起は長さ2.5cm，高さ1.8cm，厚さ1.1cmと，背部・側面部の突起と比べてかなり大きい。全長は7.7cm，各部突起を含めた幅は4.5cm，厚さは2.4cmをはかる。穿孔は両側面からなされ，孔径は0.4cm。紐ずれ痕は認められない。部分的に黒色の斑点が混じった暗い黄褐色を呈する滑石製である。一部に削り痕をとどめるもののよく研磨され，全体的に丁寧な作りである[2]。特殊な施文，線刻はなされていない。出土状況などに関しては不明である。

他に，県内では次の８例がある[3]。

(1)　佐渡郡真野町田切字小布施
(2)　　同　金井町新保川東
(3)　西蒲原郡弥彦山
(4)　　同　　分水町国上字居下
(5)　上越市青野梅田新田（富士権現境内）[4]
(6)　新井市斐太（斐太神社境内）[5]
(7)　糸魚川市田伏（奴奈川神社境内）[6]
(8)　　同　　笛吹田

子持勾玉は，勾玉状の本体に複数の突起を有するという基本的な特徴を有するものの，本体の形状，突起の形・個数には多様性が見られる。現在のところこれらの多様性を整理し，分類し，編年を確立するまでには至っていない。この間に，本体の断面形に着目され，編年観を提示されたのが，佐野大和氏である[7]。すなわち氏は，円形→楕円形→矩形に近い厚板状→扁平板状という順に形態変化をきたしたというのである。この変遷は遺構に伴う発掘例からすればほぼ正しいようである。横滝山例の断面は円形に近い楕円形で，小布施例，国上例と共に古い段階に属している。県外の日本海側地域にも，このタイプの子持勾玉が比較的多く分布している。北では，秋田県由利郡西目村井岡[8]，山形県西村山郡河北町谷地沢畑[9]，同山形市鷺の森[10]，同山形市七浦狐山[11]，同東置賜郡川西村中郷[12]，一方富山県側に下ると，富山県氷見市谷屋[13]，

同中新川郡立山町若宮遺跡[14]，石川県七尾市岩屋町[15]，同羽咋郡富来町高田[16]，同小松市矢田町新丸山[17]等である。これらはすべて断面円形に近く，両端が尖りバナナ状を呈するものである。

年代推定可能な子持勾玉の最古のものは，現在のところ大阪府カトンボ山古墳から出土した4点で，やはり断面が円形，楕円形を呈し，5世紀中頃とされている[18]。このような形の子持勾玉が，日本海沿岸地域に多く検出されている事実は，注意しなくてはならない。同様に古式に属す子持勾玉が，関東，特に霞ケ浦周辺や朝鮮半島南部から出土していることも注意される。

一方，断面が矩形に近い厚板状で，背部の突起が形骸化して連続的に作られ，波状を呈する子持勾玉が，畿内特に三輪山周辺や九州沖ノ島など限られた地域にしか分布していないことは，子持勾玉を使用する祭祀自体が変化したものか，またはその担い手が特定されていたことを示すように思われる。

横滝山出土の子持勾玉は，出土遺構や共伴遺物が不明のため，その実態については明らかでない。しかし，今後は基礎資料の蓄積とともに，古墳文化全体の中からその意義を把握していく必要があろう。

（倉林真砂斗）

註

(1) 寺村光晴・久我勇『寺泊のおいたち―先史遺跡について―』寺泊町教育委員会（昭35）
(2) 大場磐雄氏のA型第1類に属する。
大場磐雄『武蔵伊興』国学院大学考古学研究報告第2冊（昭37）
(3) 『新潟県史』（昭58）による。
(4) 寺村光晴「北陸」『神道考古学講座』第2巻（昭47）
(5) 後藤守一「石製品」『考古学講座』（昭11）斐太神社御神体の勾玉の中に9個の子持勾玉が含まれていたらしい。
(6) 関雅之『田伏玉作遺跡』（昭47）
(7) 佐野大和「子持勾玉」『神道考古学講座』第3巻（昭47）
(8) 『秋田県史』―考古編―（昭35）
(9) 川崎利夫「山形県内の祭祀遺跡について」山形考古第2巻1号（昭47）『山形県史』資料編・考古資料（昭44）
(10) 横戸昭二「山形県鷺の森遺跡について」山形考古第2巻1号（昭47）
『山形県史』資料編・考古資料（昭44）
(11) (9)と同じ
(12) 『山形県史』資料編・考古資料（昭44）
(13) 西井龍儀「氷見市谷屋発見の子持勾玉」考古学ジャーナル54（昭46）
(14) 富山県教育委員会『北陸自動車道遺跡調査報告』―立山町土器・石器編―（昭57）
(15) 川崎澄夫「石川県七尾市出土の祭祀遺物2例」貝塚76（昭33）
(16) 橋本澄夫・四柳嘉章『石川県羽咋郡富来町高田遺跡調査略報』（昭44）
(17) 上野与一「石川県江沼郡矢田新丸山古墳出土の子持勾玉」考古学雑誌第40巻1号（昭29）
(18) 古代学研究会『カトンボ山古墳の研究』古代学叢刊第1刊（昭28）

あ と が き

「横滝山廃寺跡の発掘調査は，昭和51年と57年の２回行われ，軒丸瓦や鴟尾のほか，建物の跡を示すと考えられる溝などが多数見つかっている。今回の調査では，本県で初めて塼仏の断片が新たに出土し，かつてこの地に古代寺院が所在したことがほぼ確実となった。」

これは昭和58年９月４日の新潟日報の記事でありますが，横滝山廃寺跡第３次発掘調査の成果と今後への期待の大きさを物語っています。ここにその成果をまとめあげた横滝山廃寺跡第３次発掘調査概報の刊行に際し，この調査に寄せられた文化庁や県教育委員会のご指導，調査団長の寺村光晴先生をはじめ，調査団の先生方や大学生，地元高校生，作業員のご労苦に深甚なる謝意と敬意を表するものであります。

今回の調査では，古い寺院跡を思わせる塼仏の出土が稀有の収穫とされ，幅広い溝や瓦溜め，礎石を抜き取ったと考えられる穴などが発見されました。しかし昔，この地に存在したと思われる建物の規模や性格については，明確な痕跡が検出できなかったとの調査報告でありますので，ここに秘められたロマンの究明は更に次回の調査に持ち越されることになりました。

したがって昭和59年度以降も引き続いての発掘調査が期待されるわけですが，この調査を通して横滝山の遺跡が私たちの遠い祖先の文化遺産として脚光を浴びるだけでなく，国・県のひとしく共有する貴重な遺産として，更に深い解明がなされ末長く保存・活用されることを切望するものであります。

最後に今次発掘調査に当たり墓地所有者の山宮氏をはじめ，畑の地主，耕作者各位のご協力を衷心より感謝し，今後引き続き調査が行われるようになりましたら倍旧のご支援をお願いいたします。

寺泊町教育長　　廣　田　廣　四

発掘調査関係者

○発掘調査会

会　　長　中島甚一郎（寺泊町長）

副会長　当銀敏雄（寺泊町助役）

同　宮田佐一郎（寺泊町教育委員会委員長）

顧　　問　三浦佐太夫（寺泊町議会議長）

同　橋本健二（寺泊町議会文教民生委員長）

同　竹内武治（寺泊町議会議員）

専務理事　廣田廣四（寺泊町教育委員会教育長）

理　　事　寺村光晴（発掘調査団長），中川成夫（新潟県文化財保護審議会委員），甘粕　健（同），家合俊雄（寺泊町収入役），納谷一徳（寺泊町総務課長），小田二三男（竹森区長），山田成一（竹森農区長），横山憲彰（新潟県立与板高等学校寺泊分校教頭），川端公一（寺泊中学校長），水沢荘一（大河津中学校長），水戸公四郎（寺泊町文化財調査審議会委員長），斎藤一郎（寺泊町文化財調査審議会委員），近藤丈夫（同），亀山弘義（同），竹内　武（同），吉井日佐男（同），三堀正純（同），山崎龍教（寺泊町社会教育指導員），小林武義（大河津公民館長）

○発掘調査団

団　　長　寺村光晴（和洋女子大学教授）

団　　員　上野邦一（奈良国立文化財研究所），前島己基（奈良国立博物館），千家和比古（国学院高等学校教諭），駒見和夫（早稲田大学大学院研修生），倉林真砂斗（東京大学学生），折戸靖幸，岡田健男，中山岳彦，前谷達也（以上立正大学学生），黒川敏彦，西田浩史，伊沢純一（以上成城大学学生）

顧　　問　中村孝三郎（越後古代文化研究会会長）

参加者　破入武夫，小林イク，横田チヨ，広瀬ミヨシ，本間ヤイ，大倉クラ

県立与板高等学校寺泊分校生徒

安達美和子，安達美智子，阿部美智子，遠藤広子，佐藤照美，韮沢時子，渋木智隆，八子なおみ，中村百合子，渡辺千佳子，松田玲子，田村えり子，樋口昌樹，和田次男，佃ひろみ，高橋ひとえ，青柳喜美江，斎木アヤ子，山田江美子，佐藤浩子，米山光則，内田和明，南場高司，皆川保志，斎藤芳美，三浦祐一，小熊秀信，星　純二，近藤照美，皆川日出子，小林徳成，佐藤　豊，小林ひろみ，山口多加子，高橋弘伸，山崎陽子，小林　洋

山添組（山添安次郎）

○発掘協力者

大字竹森（区長・小田二三男），阿部　力，桑野謙次

地　主　早川増雄，渡辺　敏，渡辺多嘉雄，星　勝益，星　幸喜，星　透，深谷昭三，山田庄平，星　健一，山田正一，小田二三男，山宮哲郎

○発掘調査事務局（寺泊町教育委員会）

長井正雄，田中正明，田中正徳

○お世話になった方々

文化庁，新潟県教育委員会，寺泊町，寺泊町教育委員会

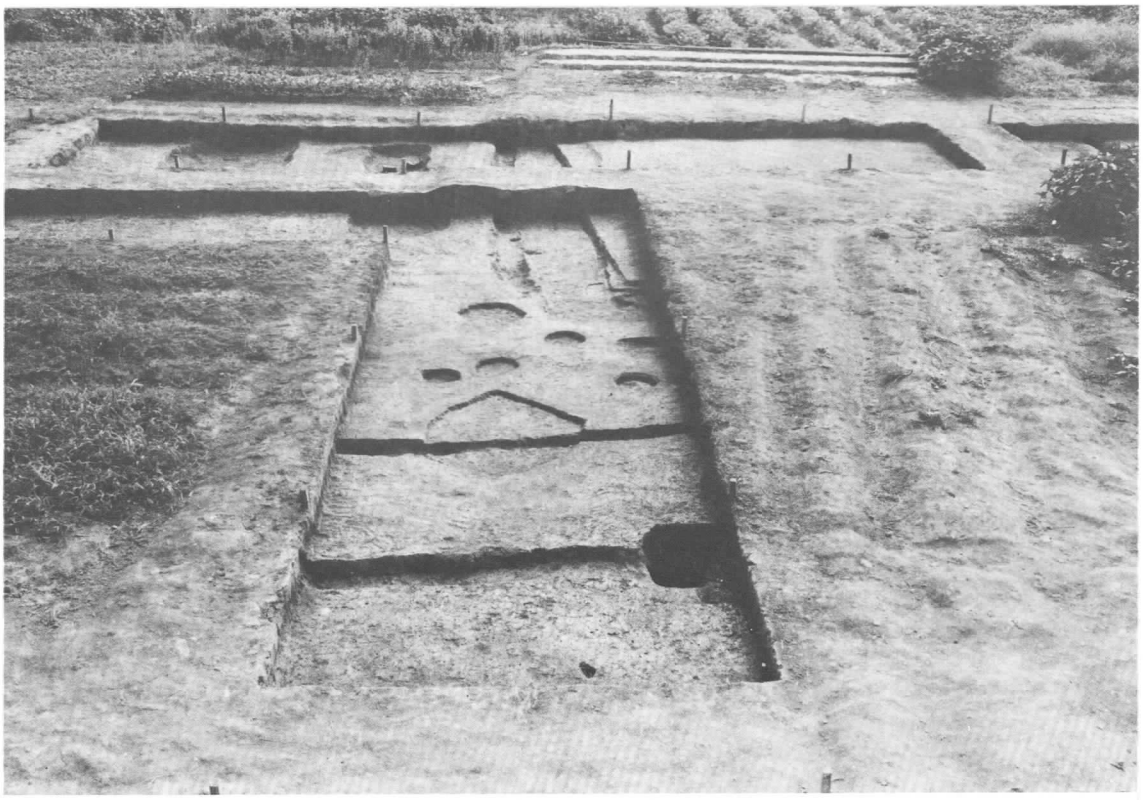
河原純之，三輪嘉六，黒崎　直，田中邦正，南　義昌，高橋　安，近藤忠造，金子拓男，中島栄一

三松亨，中川成夫，久我　勇，甘粕　健，関　雅之，花ケ崎盛明，伊藤善允，本間信昭，駒形敏郎，唐沢至朗，山崎弥作，内田昭一，若月正光，佐藤雅一，羽鳥一義，星　幸栄，星　和男，小田栄蔵

（以上順不同）

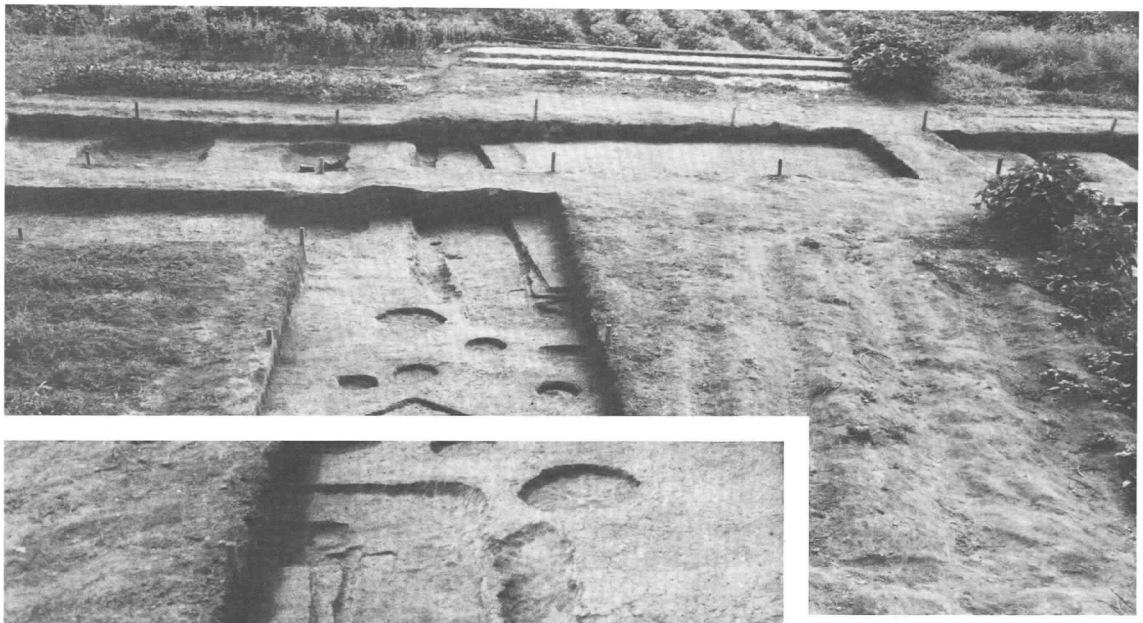
図　　版

1　台地中央部トレンチ全景（南側より）



2　SB310 北辺付近トレンチ

図版第二



1 SB310 北辺（西側より）

2　SB310 北辺（東側より）

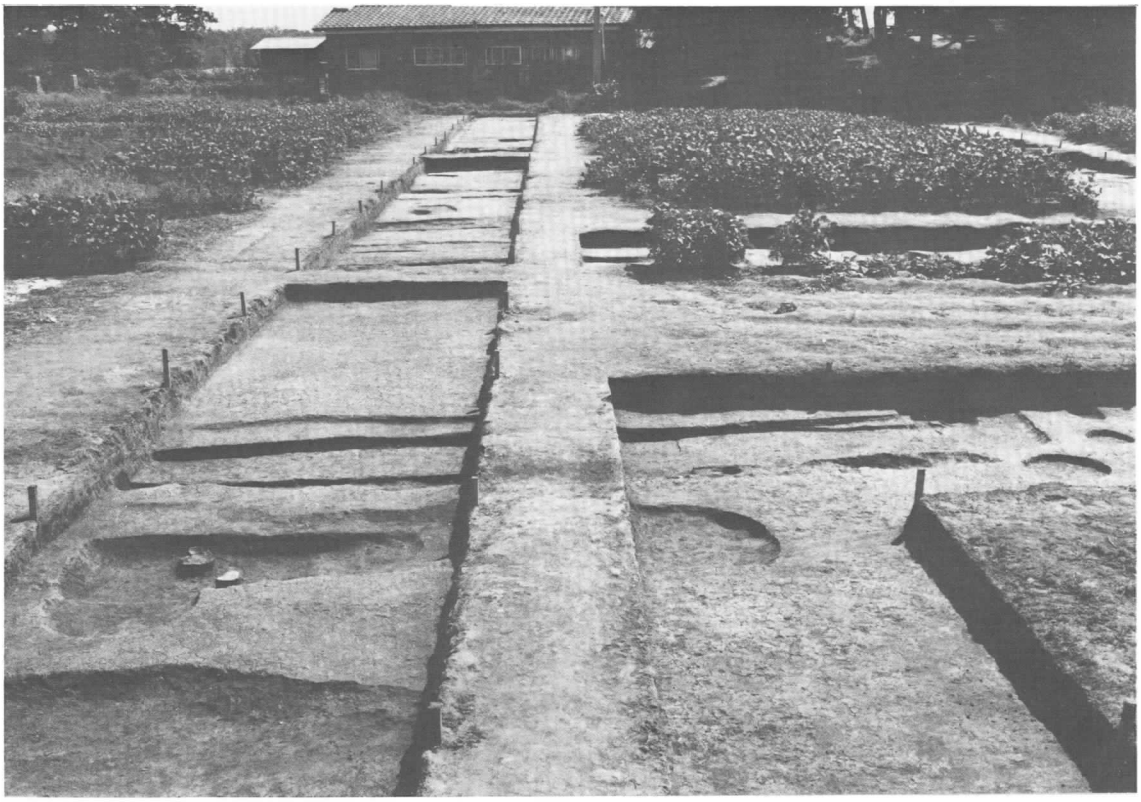
1　CR54～59 トレンチ及び SB310 南辺部分

2　DA54～61 トレンチ及び SB310 北辺部分

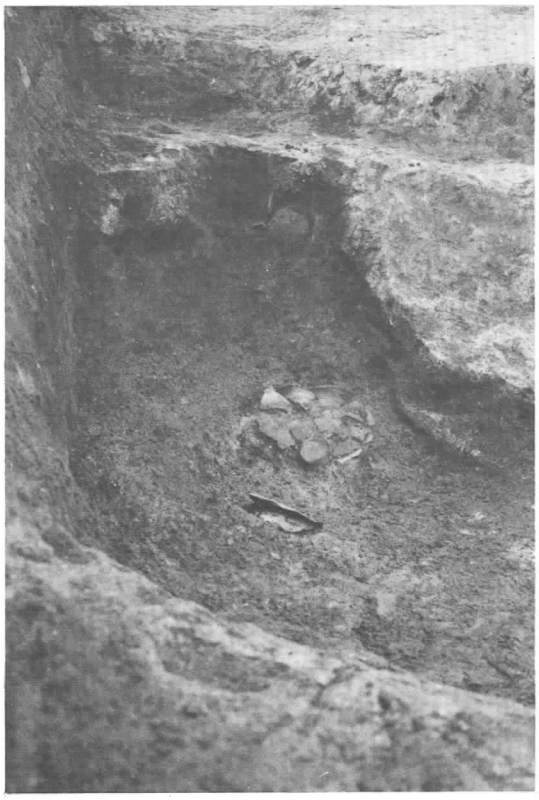
3　塼仏出土状態

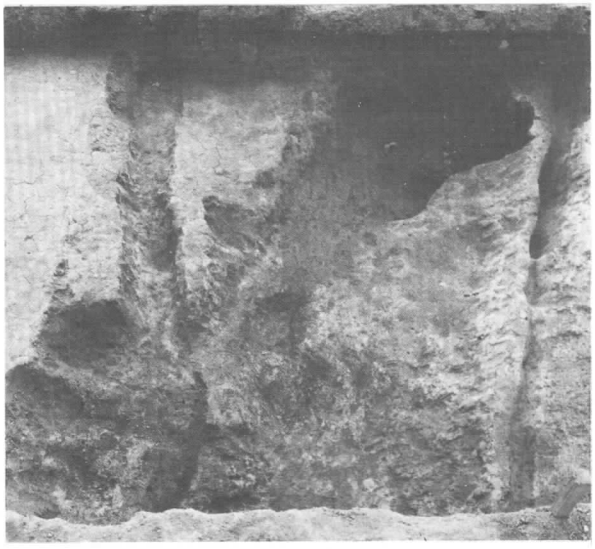
4　SB310 北辺断面

図版第四



1　CF～DC54 トレンチ及び SB310 北辺部分



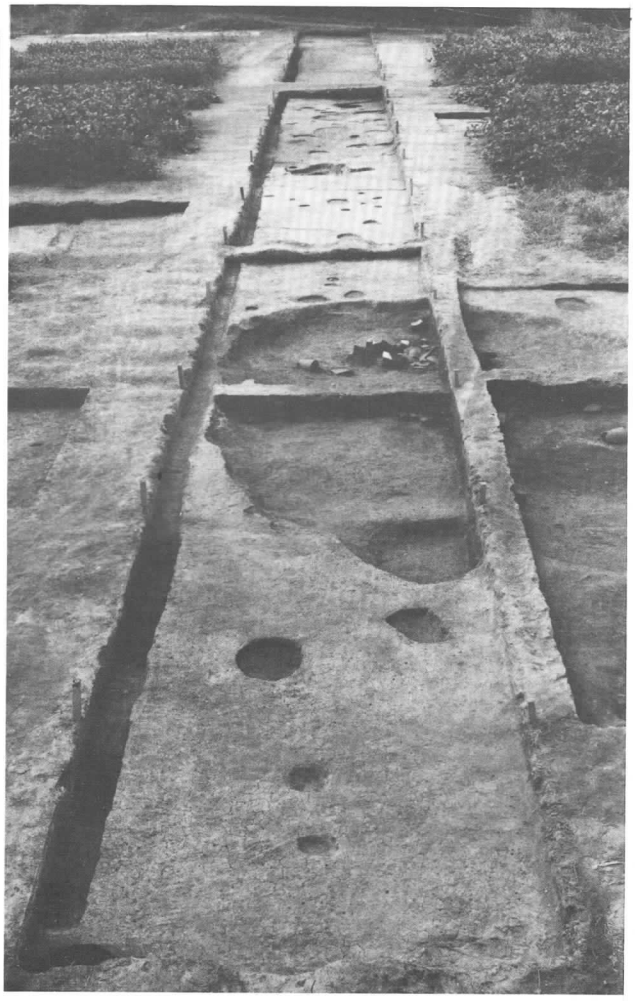


2　（左）SD305 遺物出土状態

3　（右）SD305

1　SK303

2　SK303 断 面



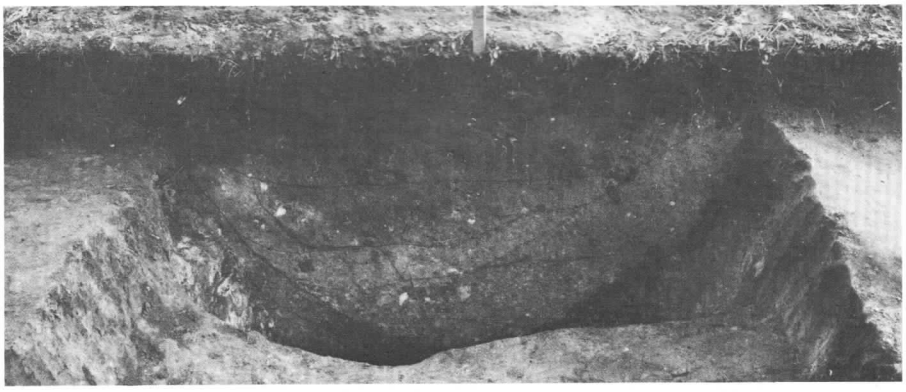
3　CG～DC59 トレンチ

図版第六

1　SK301 瓦 溜 め

2　SK302 瓦 溜 め

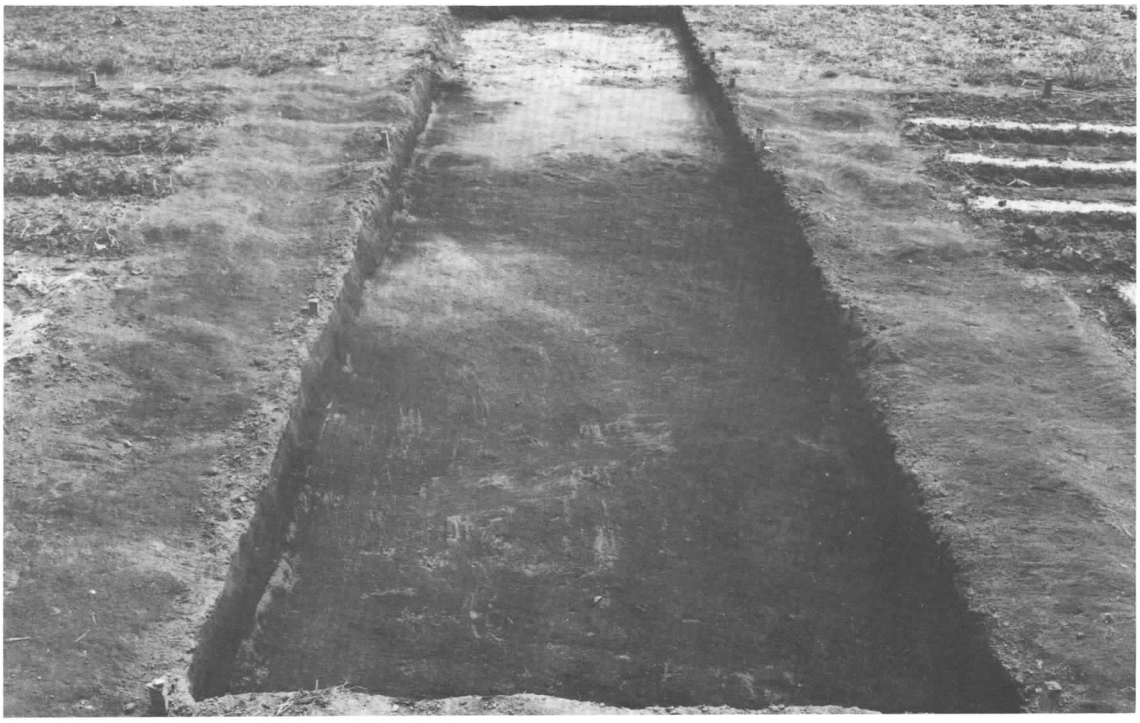
1　DH48～51 トレンチ



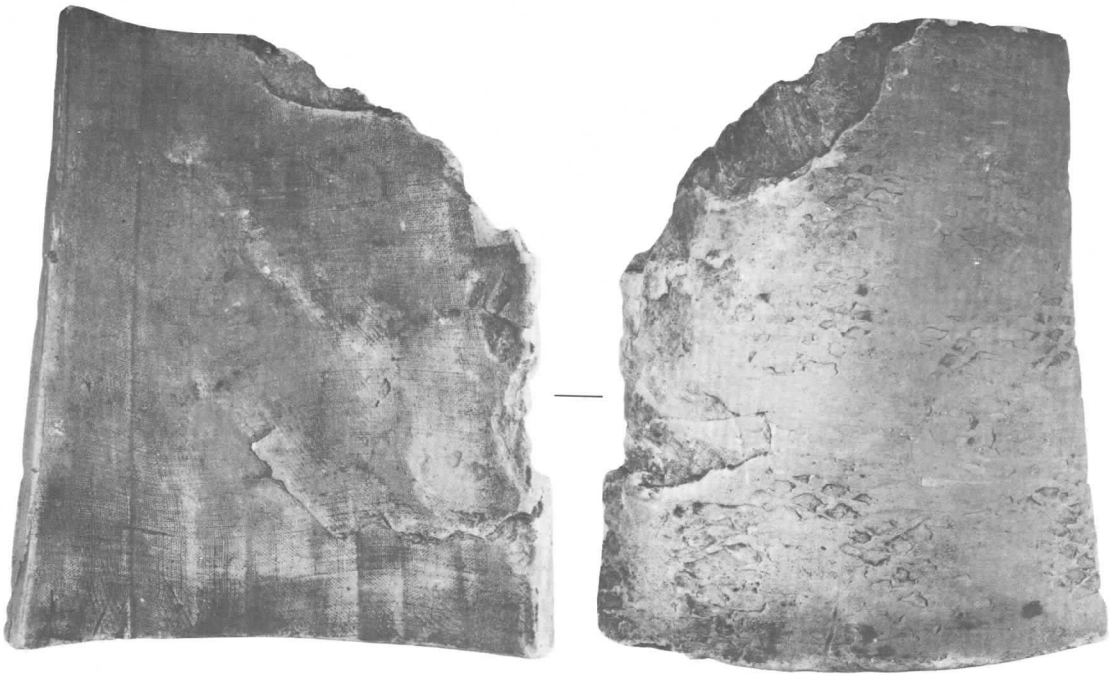
2　SD306 断 面

図版第八

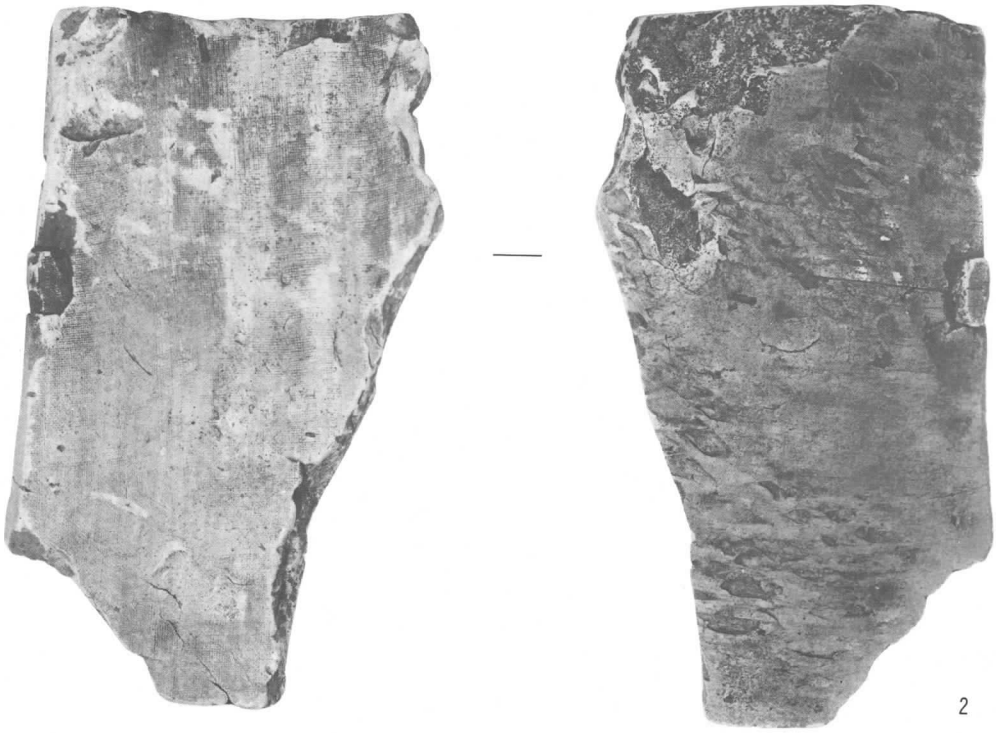
1　BJ～BR63 トレンチ



2　DJ～DM55 トレンチ



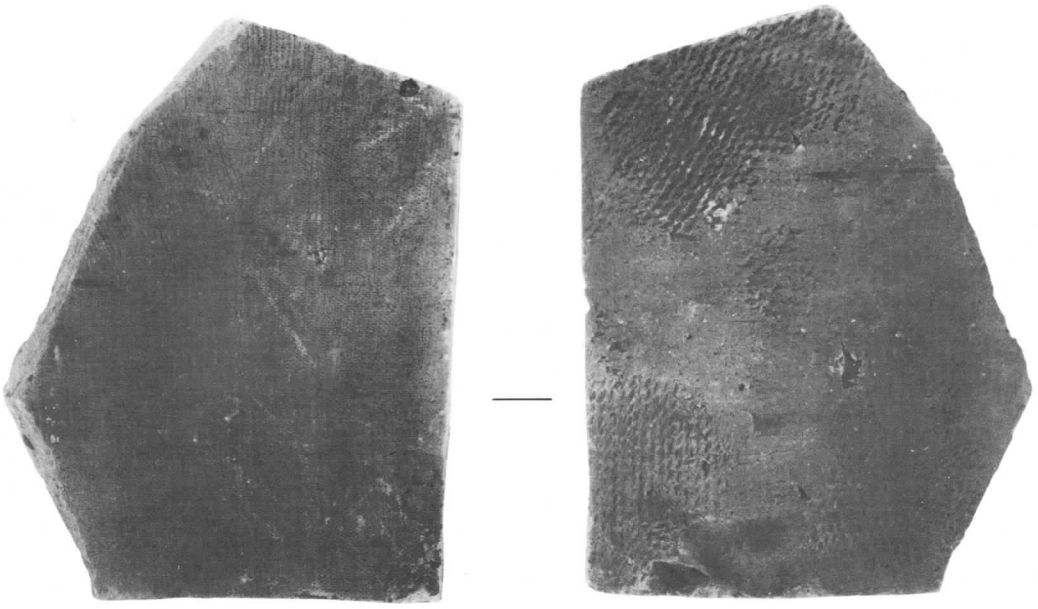
1



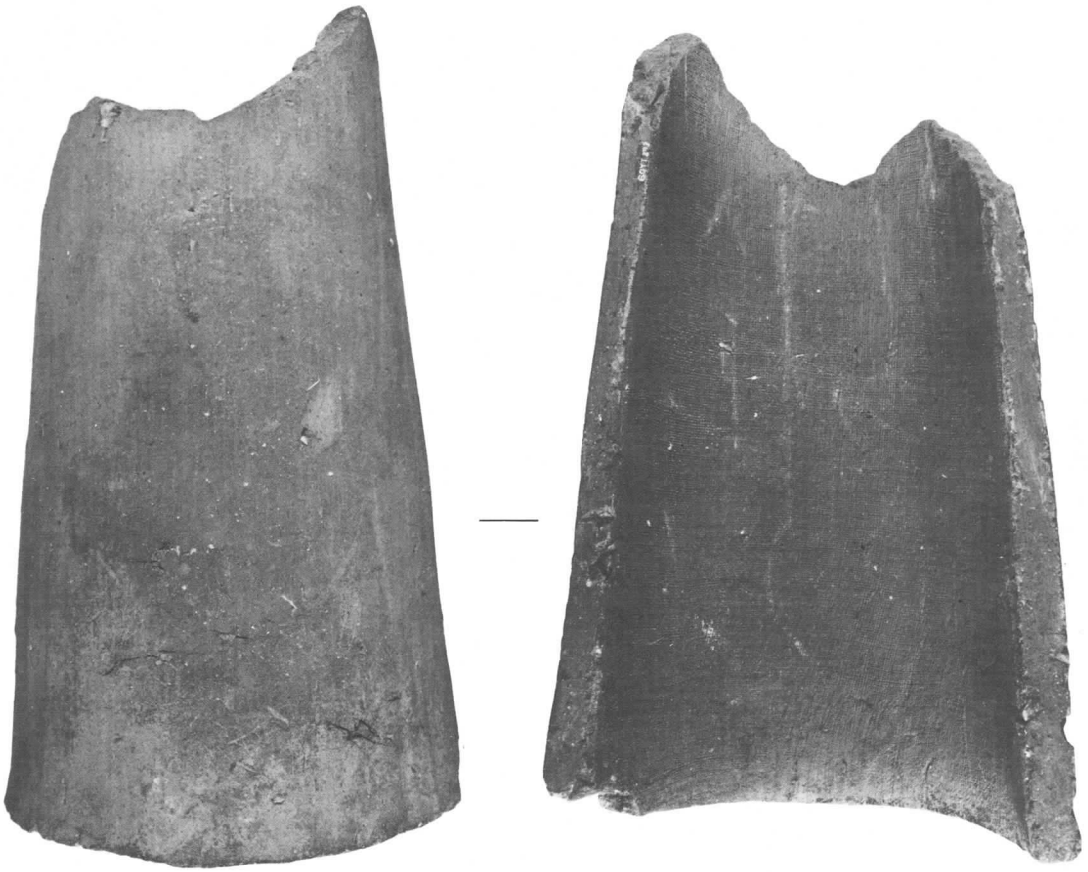
2

平　瓦

図版第十

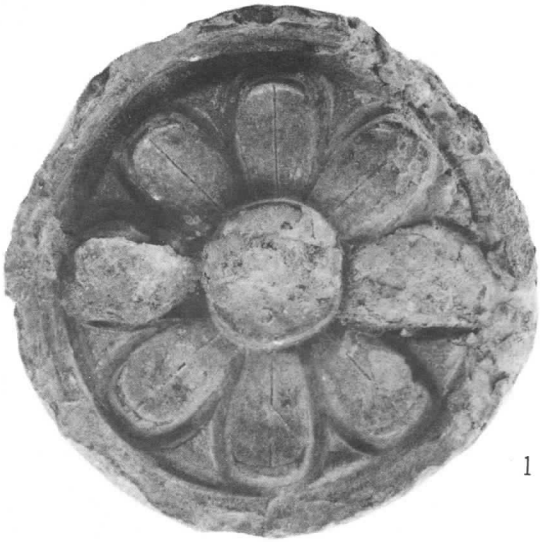


1



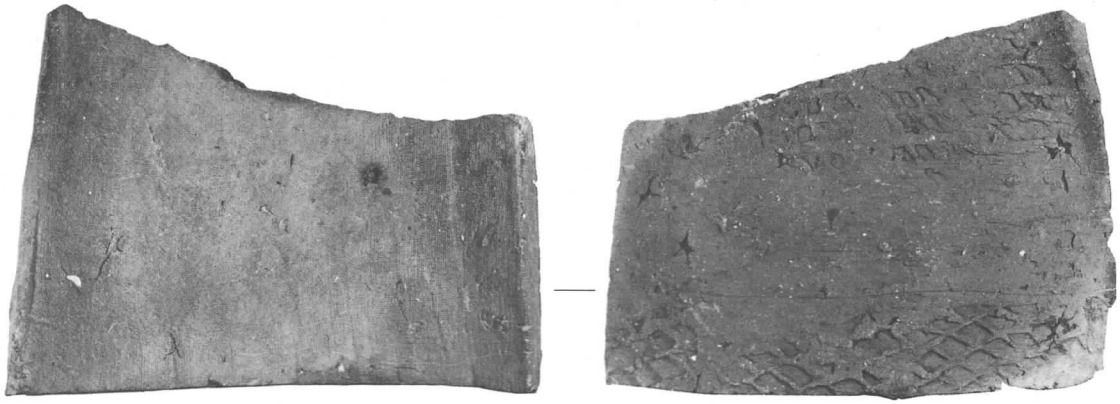
2

平 瓦 (1), 丸 瓦 (2)

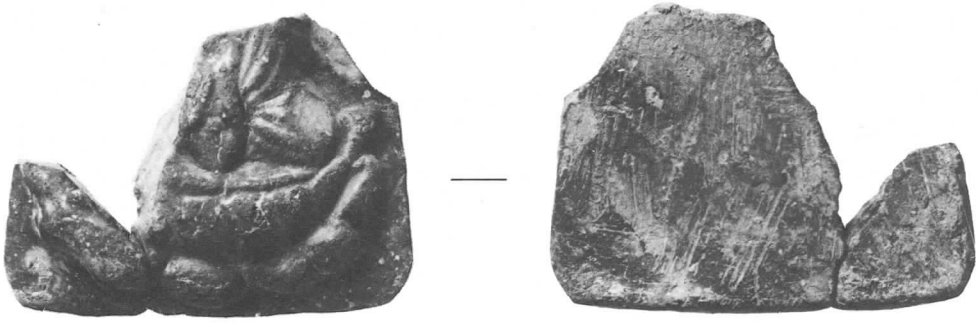


1

2



3



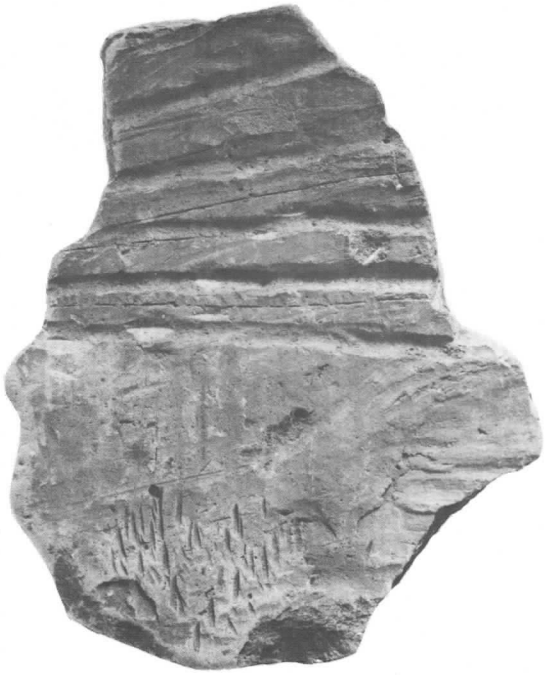
4

軒丸瓦 (1・2), 軒平瓦 (3), 塼仏 (4)

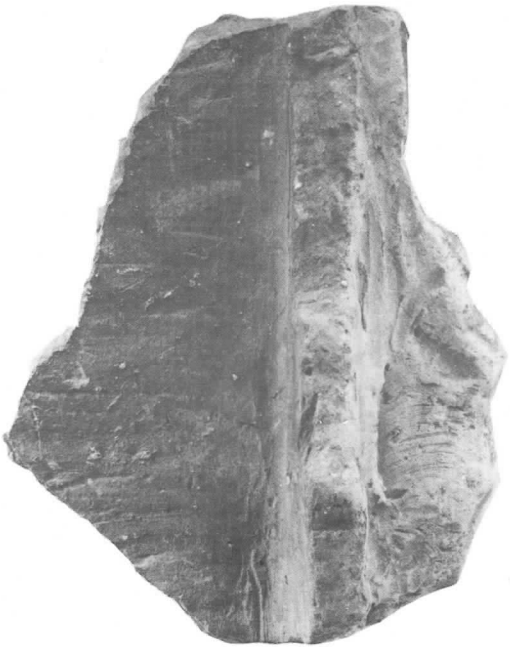
図版第十二

1

2

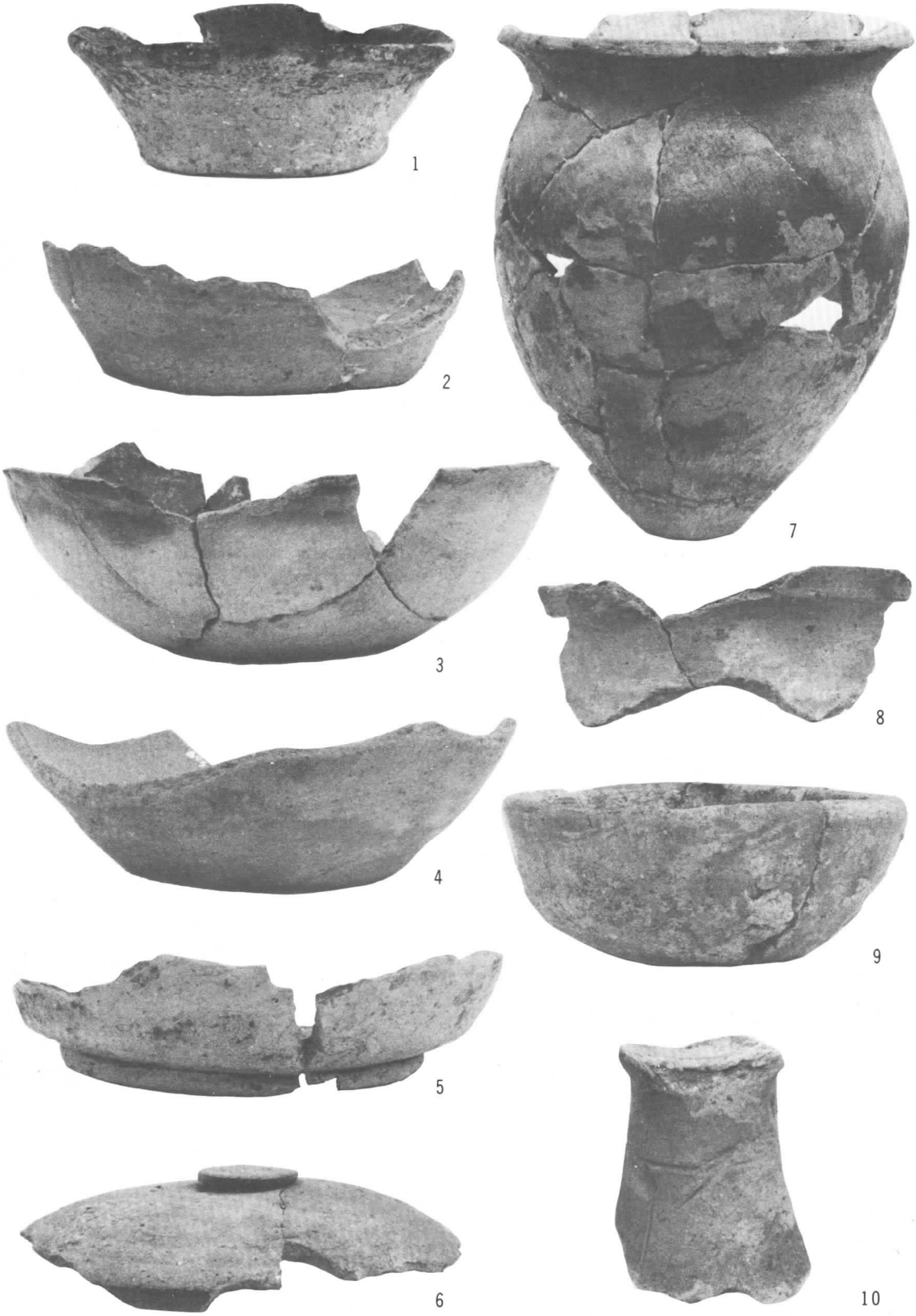


3



4

鴟　尾



土師器(1~4)　須恵器(5・6)　古式土師器(7~10)

横滝山廃寺跡発掘調査概報

——第 3 次 調 査——

昭和 59 年 3 月 31 日

発 行　寺 泊 町 教 育 委 員 会
新 潟 県 三 島 郡 寺 泊 町

印 刷　株式会社　柏 屋 印 刷 所
東京都新宿区早稲田鶴巻町506-5